富田林市埋蔵文化財調査報告 14

喜志西遺跡発掘調査概要

1986.3

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市内における遺跡数も近年の開発等による事前調査によって新たな発見をみ、120を越えるものとなりました。

本書は、こうした遺跡の発見例の一つである喜志西遺跡の調査成果および市内の式内社の一つである佐備神社に残る考古資料を報告するものであります。

最後に、調査の実施にあたって御指導ならびに御協力いただきました各位に深く感謝申し上げます。

昭和61年3月

富田林市教育委員会

教育長　福田治平

例　　言

1．本書は、富田林市教育委員会が昭和60年度に国庫および府費の補助を受け、発掘調査を実施した喜志西遺跡の概要報告書である。

2．調査は、富田林市教育委員会社会教育課　中辻亘・粟田薫を担当者とし、昭和60年４月１日に着手し、昭和61年３月31日に終了した。

3．調査を実施するにあたり、下記の諸氏から格別の助言や援助を受けた。記して感謝の意を表します。(敬称略)

北野耕平（神戸商船大学教授・富田林市文化財調査会委員）・松井忠春（財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター）・小林義孝（大阪府教育委員会）・竹谷俊夫・金原正明（以上、天理大学附属天理参考館)・大平炤（佐備神社）

4．本書の執筆は、各々文末に記すものがあたった。

5．花粉分析の原稿を金原正明氏に賜わった。

6．本書の編集は中辻が中心に行った。また、製図については粟田薫が行った。

調査参加者

浅野雅子・石上達也・石田京一・岡嶋智美・奥田正己・尾下義雄・北国友一葛和伊勢松・阪本房治・杉山泰敏・田川友美・仲井和代・中川美智代・中川一美・西尾彰夫・畠山秀夫・林信吉・端山誠一・一柳和弘・平井陽一・福田恵子・本並俊哉・三浦洋一

本　文　目　次

はじめに
例　　言

頁

Ⅰ　昭和60年度調査の概要……1
Ⅱ　位置と環境……3
Ⅲ　調査に至る経過および概要……4
Ⅳ　遺構……5
Ⅴ　出土遺物……12
Ⅵ　花粉分析……28
Ⅶ　まとめ……32
Ⅷ　佐備神社元宮司井上隆彦氏採集資料……33

表　目　次

表１　発掘調査一覧表……1
表２　喜志遺跡周辺古墳一覧表……3
表３　土壙・ピット・落ち込み一覧表……8
表４　各遺構出土遺物一覧表……13
表５　近隣の植生と栽培植物……31

挿図目次

挿図１　喜志西遺跡周辺地形図……2
挿図２　調査区位置図……4
挿図３　溝１断面図……5
挿図４　調査区東壁断面図(半田溝１)……6
挿図５　半田(掻揚田)『綿圃要務』より……6
挿図６　半田溝平面図……7
挿図７　遺構平面図……9・10
挿図８　甕棺墓平面図・断面図……11
挿図９　自然流路・溝１・土壙６・落ち込み１・ピット１・甕棺墓出土土器……15
挿図10　甕棺墓出土土器……16
挿図11　包含層および整地層出土土器……19
挿図12　自然流路出土石器……22
挿図13　自然流路出土石器……23
挿図14　溝２・土壙３・ピット１・甕棺墓出土石器……24
挿図15　包含層および整地層出土石器……25
挿図16　包含層および整地層出土石器……26
挿図17　花粉ダイヤグラム……29・30
挿図18　佐備神社元宮司井上隆彦氏採集資料……35

図　版　目　次

図版１　　喜志西遺跡周辺航空写真
図版２（上）半田溝全景(検出時）南から
　　（下）半田溝全景(完堀後）南から
図版３（上）半田溝１東壁断面　西から
　　（下）半田溝３断面　南から
図版４（上）自然流路(第５トレンチ）全景　北から
　　（下）自然流路(第５トレンチ）全景　南から
図版５（上）第５トレンチ全景　南から
　　（下）自然流路遺物出土状況　東から
図版６（上）溝１(第５トレンチ）北から
　　（下）溝１(第４トレンチ）東から
図版７（上）溝１(第３トレンチ）北西から
　　（下）溝１(第６トレンチ）南から
図版８（上）溝２(第４トレンチ）西から
　　（下）溝２断面(第４トレンチ）南から
図版９（上）溝２(第３トレンチ）北から
　　（下）溝２断面(第３トレンチ）北から
図版10（上）第１トレンチ全景　南から
　　（下）第２トレンチ全景　南から
図版11（上）第２トレンチ西半部全景　南東から
　　（下）第７トレンチ全景　南東から
図版12（上）甕棺墓検出状況　西から
　　（下）甕棺墓検出状況　東から
図版13（上）甕棺墓検出状況　北西から
　　（下）甕棺墓検出状況　北西から
図版14（上）甕棺墓全景　北から
　　（下）甕棺墓全景　南から
図版15（上）甕棺墓全景　北西から
　　（下）甕棺墓掘り方全景　北から
図版16　　出土遺物(土器)
図版17　　出土遺物(石器)
図版18　　花粉遺体
図版19　　佐備神社元宮司井上隆彦氏採集資料
図版20　　佐備神社元宮司井上隆彦氏採集資料

Ⅰ　昭和60年度調査の概要

No.	調査期間	遺　跡　名	位　　置	申　請　者	規 模(㎡)	用　　途	備　　考
1	60. 4 . 24	錦織南遺跡	錦織98	ニッシン㈱ 田中　正之	16,475	工　　場	2×10m のトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
2	60. 5 . 15	別 井 遺 跡	別井元南89－3	辻野　利幸	188	個人住宅	0.8×1.2mのトレンチを機械掘削し断面観察。地表下0.6mで地山面を掘ったピットを確認。
3	60. 5 . 29	新 家 遺 跡	新家236－1	鳴川　　博	464.21	個人住宅	2×2mのトレンチを機械掘削し断面観察。地山上に土師器、須恵器片を含む堆積層を確認。
4	60. 8 . 1	桜 井 遺 跡	桜井町1丁目 2996－8	和多　豊彦	94.75	個人住宅	1×3m のトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
5	60. 8 . 2 ～8 . 5	新堂南遺跡	昭和町2丁目 1795－1	肉さかもと 阪本　正寿	998.31	飲 食 店	新規発見。4×17m 分調査。 溝1条検出。
6	60. 8 . 21	錦織南遺跡	錦織 208 208－3	前田道路㈱ 中田　陵資	939.897	プレハブ 事務所2棟	1.5×2mのトレンチを機械掘削し断面観察。地表下1.8mで遺構を確認。
7	60. 8 . 27	錦織南遺跡	錦織 135－1 147－1	中西　義男	813.3	個人住宅	1.5×2mのトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
8	60. 9 . 4	桜 井 遺 跡	桜井町1丁目 4326	山本　敏和	428.89	個人住宅	1×2mのトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
9	60. 9 . 11 ～10. 23	喜志西遺跡	喜志町3丁目 979－1	山本　廣一	1055.22	店舗付 共同住宅	本書掲載
10	60. 9 . 17	甲田南遺跡	甲田110－3	大西　洋平	713	駐 車 場	1.5×5mのトレンチを2ケ所、機械掘削し断面観察。弥生土器、須恵器を含む遺構を確認。
11	60. 9 . 18	中 野 遺 跡	若松町西2丁目 1744－1	稲本　俊男	405.74	倉　　庫	1.5×5m のトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
12	60. 10. 8	新 家 遺 跡	新家20	前田　利一	416.55	個人住宅	3×10mのトレンチを機械掘削し断面観察。ピット、落ち込みを確認。
13	60. 10. 11	新 家 遺 跡	新家271－5	関田　重信	281.61	個人住宅	2×2.2mのトレンチを設定、地山面まで精査。溝、ピット検出。
14	60. 10. 28 ～10. 30	桜 井 遺 跡	川面町1丁目 6－29	巽　　正俊	471.9	寺　　院	2×2mのトレンチを設定、地山面まで精査。弥生時代の遺物を含む包含層を確認。遺構なし。
15	60. 12. 11	佐備川西岸遺跡	佐備1216－1	中尾　義弘	200.51	個人住宅	1.5×2mのトレンチを機械掘削し断面観察。地表下0.6mで遺構を確認。
16	61. 2 . 14	桜 井 遺 跡	川面町1丁目 3253	㈲近畿住宅 センター ㈹阪本丰司	477.26	分譲住宅	1.5×5m のトレンチを機械掘削し断面観察。遺構、遺物なし。
17	61. 2 . 17 ～	中佐備窯跡	佐備1463－1	箕城　正照	396	個人住宅	調査中。

表1　　発掘調査一覧表

茶臼山古墳
喜志遺跡
通法寺
源氏三代
丸流谷古
喜志古墳群
3号墳
2号墳
1号墳
喜志遺跡
織家古墳
粟ケ池遺物散布地
桜井遺跡
宮神社裏山古墳群
3号墳
2号墳
1号墳
宮前山古墳群
3号墳
2号墳
1号墳
墓名井古墳
中野城遺跡
お亀石古墳
オガンジ池瓦窯
新堂廃寺
新堂古墳群
中野遺跡
六反池古墳
老人谷城跡
老人谷遺跡
富田林寺内町
小金平古墳群
たいたい池火葬墓
宮林古墳
錦織神社遺跡
甲田遺跡
新家古墳
新家古墳
新家遺跡
川西古墳
甲田南遺跡
細井廃寺
錦織遺跡
錦織廃寺
彼方遺跡群
彼方古墳
彼方西遺跡
彼方丸山古墳
梅風台古墳
佐備遺跡
佐備谷口城跡
柳谷池南遺跡
佐備神社西遺跡
中佐備窯跡
錦織南遺跡
須賀廃寺
梅田遺跡
西大寺山北古墳
西大寺山古墳
西板持遺跡
板持丸山古墳
山中田遺跡
平木遺跡
板持4号古墳
寺弘寺西古墳群
板持古墳
板持1号墳
板持2号墳
寺弘寺古墳群
尾哥遺跡
挿図1 喜志西遺跡周辺地形図

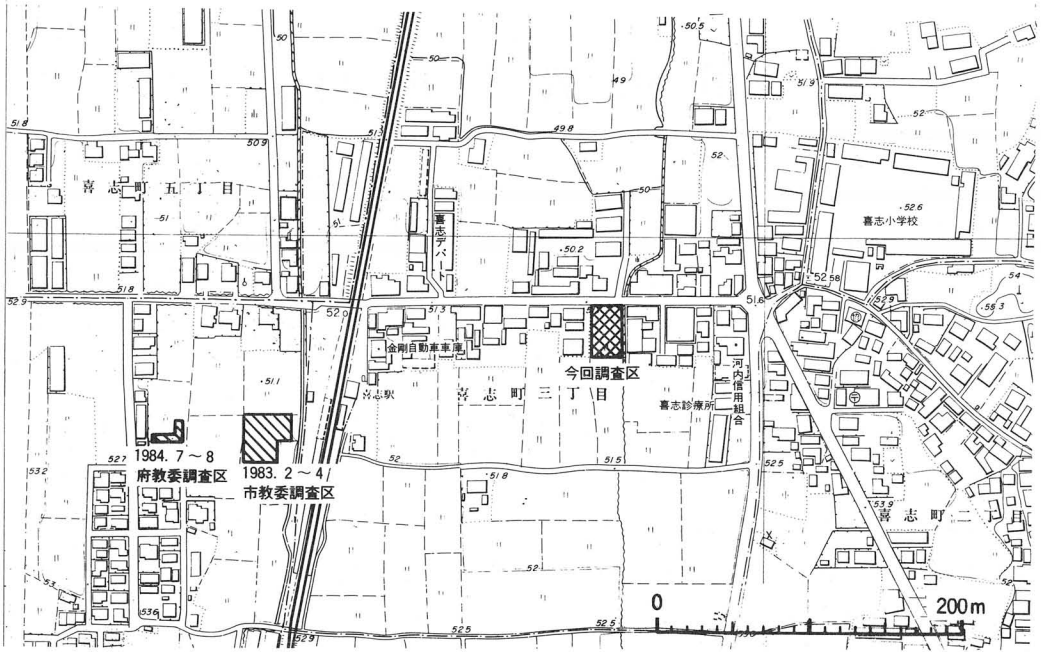
Ⅱ 位 置 と 環 境

喜志西遺跡は、市域の北端部にあって、行政区画上大阪府富田林市旭ケ丘町、喜志町３丁目同５丁目に位置する。本遺跡の西方には羽曳野丘陵が南北にのび、東方には石川が北流している。羽曳野丘陵と石川との間に形成される平坦面、すなわち河岸段丘面には本遺跡をはじめ多くの集落遺跡等が分布している。また、これらの遺跡を東方に見おろす羽曳野丘陵東縁には多くの古墳が営まれている。

本遺跡の北東方約500ｍには、弥生時代中期の集落址である喜志遺跡がある。南方約1.5kmには、弥生時代中期から中世に至る集落址である中野遺跡があり、喜志・中野両遺跡はサヌカイト製石器未製品やサヌカイト剝片を大量に出土することで著名である。本遺跡南方約 700 ｍには、開析谷を塞き止めて造られた粟ケ池があり、周辺には遺物散布地をはじめ、古墳時代後期から中世に至る桜井遺跡、さらに中世の集落址である中野北遺跡がある。

古 墳 名	種　類	立地・地目	規 模 範 囲	遺　構　・　遺　物	時　代
茶臼山古墳	円墳	丘陵腹・山　林	痕跡のみ留める。	須恵質鴟・提瓶・蓋・坩	古墳時代後期
平第１号古墳	前方後方墳	丘陵上・山　林	全壊・全長50ｍ・後方部一辺30ｍ・前方部長20ｍ	木棺直葬・器台１・無蓋高杯３・子持器台１・蓋杯１・壺１・土師質壺・四耳壺１・鉄釘・台付長頸壺２・銅製耳輪残欠・有蓋坩１・火葬壺・小壺１・提瓶・鴟１・有蓋高杯４	古墳時代後期（６世期後半）
平第２号古墳	円墳	丘陵上・山　林	全壊・径20ｍ	木棺直葬・提瓶・無蓋高杯・隆平永寶	古墳時代後期（６世紀後半）
鍋 塚 古 墳	円墳	丘陵上・山　林	全壊・径30ｍ	土壙・円筒埴輪列・溝状遺構・鏡・釧・有孔石製品・石製刀子・須恵器・六獣鏡・短甲・朝顔形埴輪・柳葉式鉄鏃27	
宮神社裏山古墳群第１号古墳	前方後円墳？	丘陵上・山　林	全長58ｍ・後円部径40ｍ・前方部幅4.8ｍ・前方部高3.3ｍ	円筒埴輪・朝顔形埴輪	古墳時代前期
第２号古墳	円墳	丘陵腹・山　林	完存・径７ｍ・高さ１ｍ	墳丘西側に幅約2.5ｍ の半環状空濠を有する。	古墳時代
第３号古墳	円墳	丘陵上・山　林	完存？・径17ｍ・高さ2.5ｍ		古墳時代
第４号古墳	円墳	丘陵腹・果樹園	半壊	横穴式石室・附近で亀甲形陶棺片が採集されている。	古墳時代後期
直名井古墳	前方後円墳	丘陵上・山　林	全壊・全長60ｍ・後円部径40ｍ・前方部幅20ｍ・後円部高５ｍ・前方部高１ｍ	組合式木棺を内部主体とする粘土槨・平縁の鏡片・碧玉製管玉２・土師質甕形土器・三角縁三神三獣鏡１・鉋・錐・刀子・有袋形鉄斧・短冊形鉄斧・鉄鏃15・刀身状利器・碧玉製紡錘車	古墳時代前期（４世紀末）
宮前山古墳第１号古墳		丘陵腹・果樹園	全壊	丸石積側壁遺構・砂岩製組合式横口式石棺・須恵質長頸壺・石棺は大阪大学に移築されている。	古墳時代後期
第２号古墳		丘陵腹・果樹園	全壊	横穴式石室	古墳時代後期
第３号古墳		丘陵腹・果樹園	全壊	横口式小石室・土師質土器・その他宮前山丘陵上から方形塼が出土している。	古墳時代後期

表２　喜志西遺跡周辺古墳一覧表



挿図２　調査区位置図

Ⅲ　調査に至る経過および概要

富田林市喜志町３丁目979－１番地において店舗付共同住宅建設の計画があり、昭和60年８月23日付けで「富田林市開発指導要綱」に基づく協議が成立した。協議の結果、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地ではないため、開発に先立ち開発者の協力を得て昭和60年８月28日に試掘調査を実施した。

予定地に３本のトレンチを入れて遺構の有無を確認した結果、地表下約30cmの灰褐黄色粘質土上および地表下約60cmの黄色粘質土（地山）面に溝状遺構を検出した。この調査結果に基づき、文化財保護法第84条の規定による「遺跡の発見届出書」ならびに第57条のこの規定による「発掘届出書」を昭和60年９月３日付けで受理し、本格的な発掘調査を実施するに至った。現地調査は、昭和60年９月11日に開始し、同年10月23日に終了した。

調査は、基礎掘削によって影響を及ぼす部分を対象にした。その結果、試掘調査の資料をもとに２面を調査対象とし、第１面を約700㎡、第２面を約260㎡、計960㎡の面積とした。第２面においては建物の基礎および浄化槽布設部分を計７ケ所に分けて、それぞれ第１トレンチから第７トレンチとした。調査区は、現況は水田となっており、周辺地域は富田林市域において比較的良好に条里制地割を残す。

Ⅳ 遺　　構

自然流路

調査区北東端部、第５トレンチ内で検出した流路である。北北西に流れる。長さ約22.5m分を検出した。幅については東肩部を調査区外に残すため不明である。深さは第５トレンチ東壁北端部で60cmを測る。

埋土は大別して３層に分かれる。上から順に濁黄灰褐色粘質土および黒灰色粘質土（厚さ約20cm)、濁黄灰青色粗砂（約15cm)、灰青色粗砂および橙色砂（厚さ約25cm）が堆積しており、下層の粗砂等の堆積した状況から当所は良好な水量を保っていたことがうかがえる。

遺物には、須恵器・土師器・弥生土器・石器・砂岩製敲き石・木片がある。

溝１

調査区東半部を北北西に流れる溝である。第５トレンチ南端部から第３トレンチ中央部および第７トレンチ西端部から第６トレンチにかけて検出した。自然流路から約２～３ｍの距離をおいて、平行に流れる。

幅は、第３トレンチ内では1.7ｍを測る。深さは、第４トレンチでは50cmを測り、各トレンチ内の深さもほぼ共通する。南端と北端での比高差は認められない。

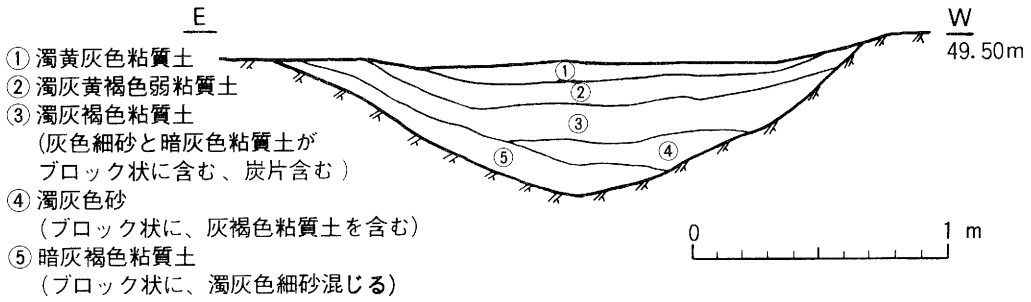
埋土は、上から順に濁灰黄褐色粘質土（厚さ約10cm)、濁灰色砂（厚さ10cm)、濁黄灰褐色粘質土（厚さ約10cm)、濁灰褐色粘質土（厚さ約15cm)、濁灰色粗砂（厚さ約５cm）が堆積する。

遺物には、須恵器・土師器・サヌカイト製石器がある。

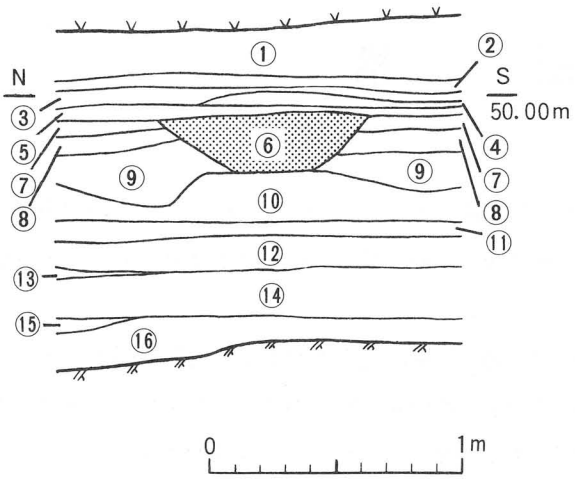
溝２

調査区中央を北流する溝である。第４トレンチ西端部および第３トレンチ西端部で検出した。溝１の西に位置する。

幅は第３・４トレンチ共80cmを測る。深さは第４トレンチで27cm、第３トレンチで22cmを測る。両トレンチ間の底でのレベル差は約10cmある。



挿図３　溝１断面図



① 耕土１（暗灰色土）
② 耕土２（灰色土）
③ 灰黄色土
④ 灰茶色土
⑤ 茶灰色土
⑥ 黒灰色土に褐灰黄色混砂粘質土がブロック状に混じる
⑦ 濁黄灰色粘質土
⑧ 褐灰色弱粘質土
⑨ 褐灰黄色混砂粘質土
⑩ 濁灰黄褐色粘質土（炭片含む）
⑪ 濁灰色粗砂と灰黄色粘質土が混じる
⑫ 褐灰黄色混砂粘質土より灰色味が強い
⑬ 濁灰黄色混砂粘質土
⑭ 濁灰褐色混細砂粘質土と黄灰色粘質土が混じる
⑮ 濁灰色粗砂と灰黄色粘質土が混じる
⑯ 濁黄灰褐色粘質土

挿図４　調査区東壁断面図（半田溝１）

埋土は、大別して３層から成る。上から順に濁黄灰色粘質土（厚さ８cm）、濁灰褐色粘質土（厚さ９cm）、濁灰色砂（厚さ10cm）が堆積する。

遺物には、須恵器・土師器およびサヌカイト製石器がある。

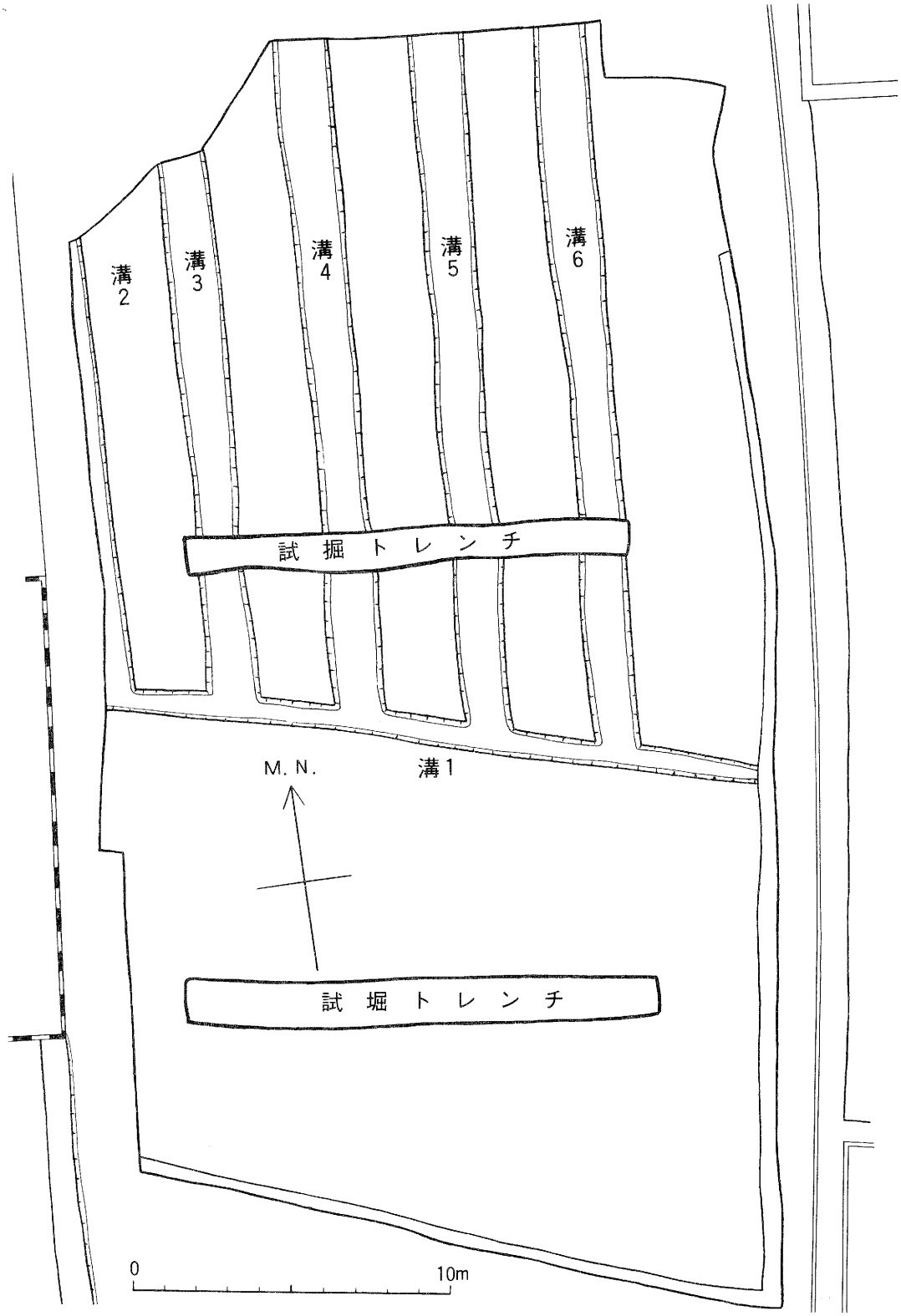
半田溝

調査区北半部第４層（濁黄灰色粘質土）上面で検出した溝である。幅50cm、深さ23cmを測る東西方向の１条の溝から５条の溝が約2.5ｍの間隔を保ちながら北方向に分岐している。東西方向の溝を溝１とし、南北方向の溝を西から順に溝２から溝６とした。

挿図５　半田（掻揚田）『綿圃要務』より

溝２から溝６のそれぞれの幅は1.8ｍ、深さは平均20cmを測る。北端と南端との比高差は平均６cmある。検出長はそれぞれ、溝１は21ｍ、溝２は14ｍ、溝３は17ｍ、溝４は21ｍ、溝５は21.5ｍ、溝６は22.5ｍである。なお、調査区東壁断面でも南北方向の溝が認められる。溝６と東壁溝との間隔は４ｍを測る。

埋土は、黒灰色土が主体で、灰褐色混砂粘質土が部分的に混入している。遺物は、溝１には須恵器および土師質土器、溝２には須恵器および土師器、溝３には須恵器、土師器、弥生土器および石器、溝４と溝６には土師器、溝５には瓦器、磁器および土師器を含む。

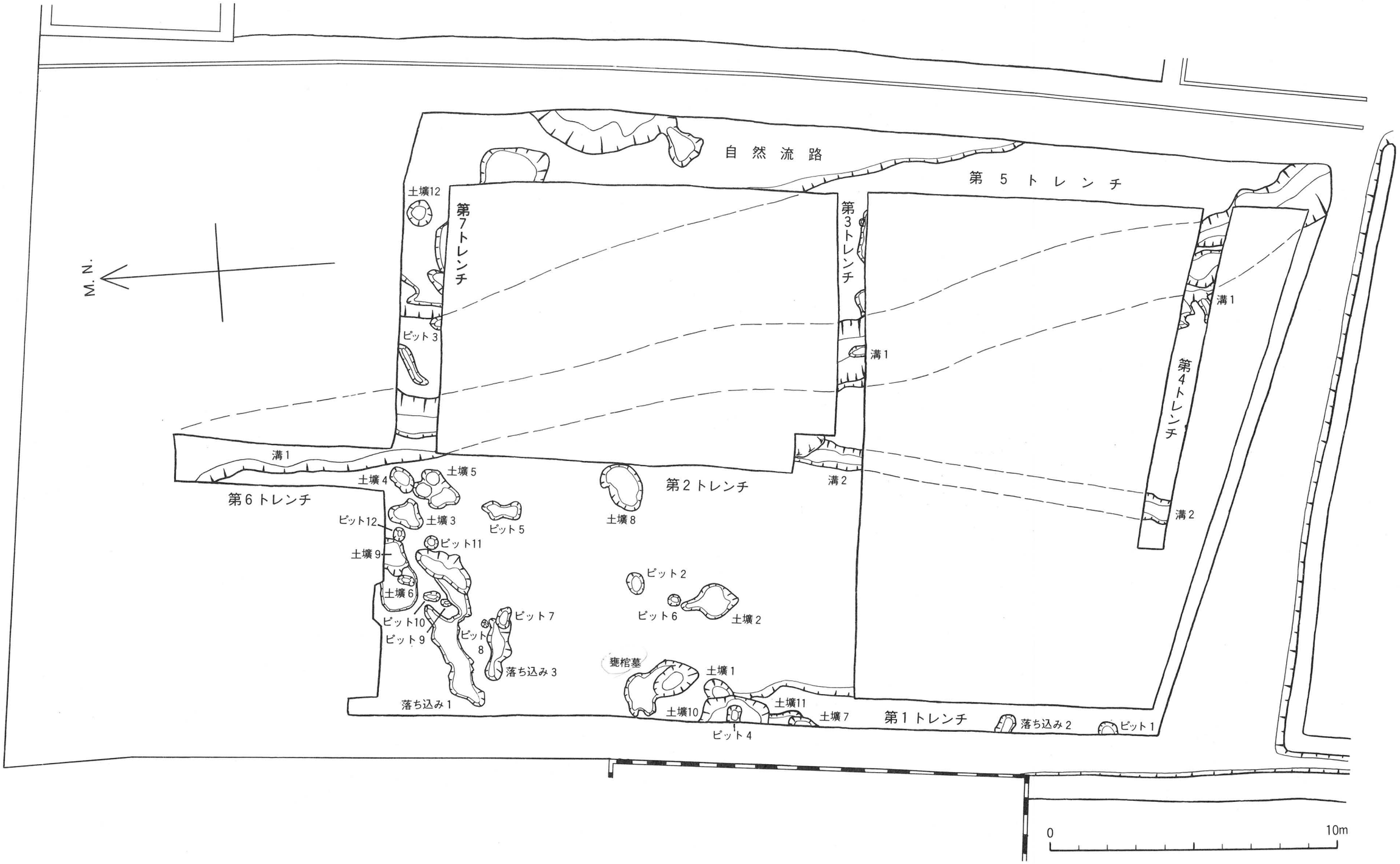


挿図6　半田溝平面図

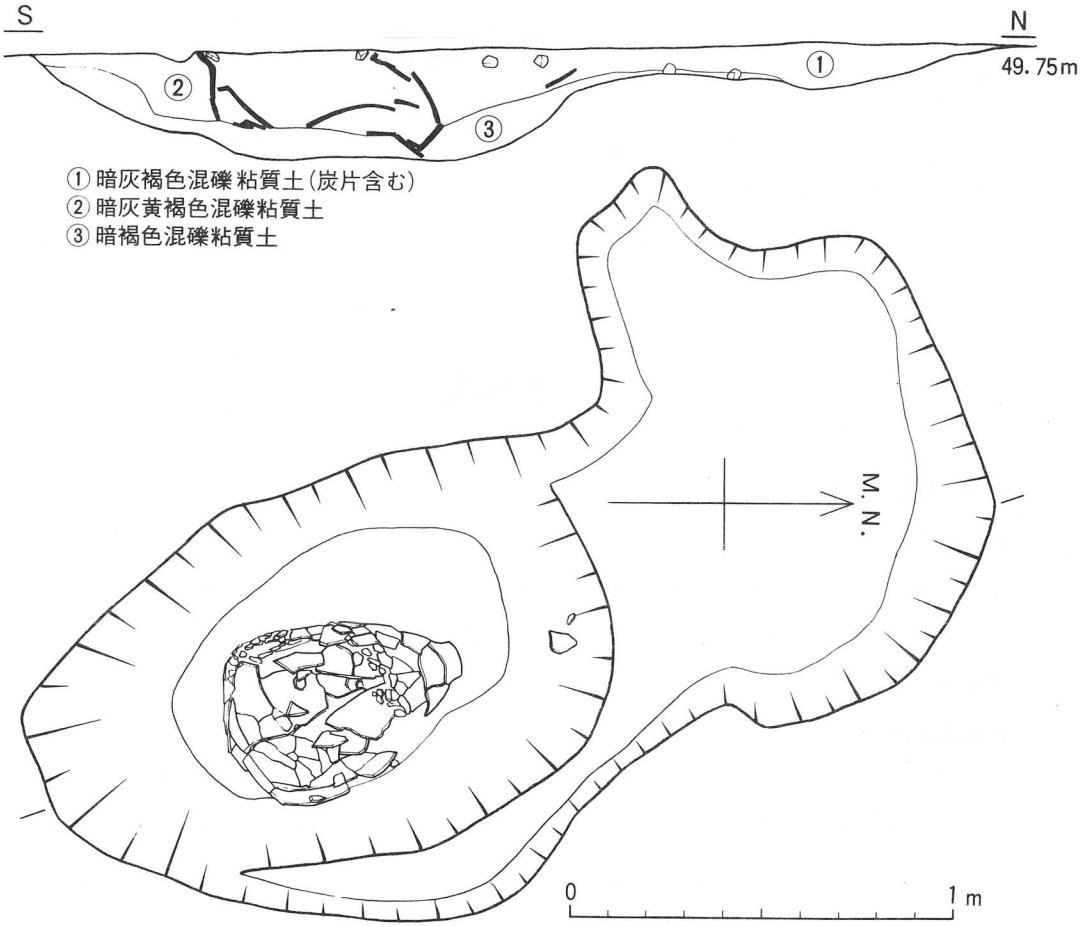
土壙・ピット・落ち込み

遺　構	形　状	大きさ(m)	深さ(cm)	土　　色	遺　　物
土　　壙					
土　壙　1	(楕円形)	(1.9)× 1.0	24.3	黒褐色粘質土	弥生土器・石器
土　壙　2	不　整　形	1.2　× 1.7	22.8	暗灰黄褐粘質土	弥生土器
土　壙　3	隅丸三角形	1.08 × 1.04	16.9	黒灰色粘質土	石器
土　壙　4	隅丸長方形	0.98 × 0.48	28.1	灰褐色混礫粘質土	石器
土　壙　5	不　整　形	1.3　× 1.5	23.2	暗褐色混礫粘質土	須恵器・弥生土器・石器
土　壙　6	楕　円　形	(2.56)× 1.24	10.5	灰褐色混礫粘質土	須恵器・土師器
土　壙　7	楕　円　形	(0.2)×(1.0)	7.1	暗灰褐色粘質土	土師器
土　壙　8	不　整　形	1.9　× 1.15	32.7	黒褐色粘質土	瓦器・須恵器・土師器・弥生土器・石器
土　壙　9	楕　円　形	(1.42)×(0.8)	30.7	灰褐色混礫粘質土	
土　壙　10	楕　円　形	2.26 ×(0.78)	6.7	灰褐色粘質土	
土　壙　11	不　整　形	(1.08)×(0.42)	29.3	濁黄褐色粘質土	
土　壙　12	円　　形	0.96 × 0.82	33.7	黒灰色粘土	
ピ　ッ　ト					
ピ　ッ　ト　1	(円　形)	(0.66)×(0.44)	12.6	濁灰黄色粘質土	弥生土器・石器
ピ　ッ　ト　2	楕　円　形	0.7　× 0.5	4.0	暗褐色混礫粘質土	須恵器・土師器
ピ　ッ　ト　3	(円　形)	(0.28)×(0.18)	11.0	暗褐色混礫粘質土	土師器
ピ　ッ　ト　4	円　　形	(0.52)×(0.44)	22.5	灰褐色砂質土	瓦・須恵器・土師器
ピ　ッ　ト　5	不　整　形	0.5　× 1.2	15.1	灰褐色粘質土	瓦器・土師器
ピ　ッ　ト　6	円　　形	0.34 × 0.38	20.6	暗褐色粘質土	
ピ　ッ　ト　7	楕　円　形	0.6　× 0.4	7.9	暗灰褐色粘質土	
ピ　ッ　ト　8	円　　形	0.24 × 0.18	11.5	暗灰褐色粘質土	
ピ　ッ　ト　9	円　　形	0.24 ×(0.3)	21.1	灰褐色粘質土	
ピ　ッ　ト　10	楕　円　形	0.28 × 0.47	10.9	灰褐色混礫粘質土	
ピ　ッ　ト　11	円　　形	0.48 × 0.4	9.1	暗褐色混礫粘質土	
ピ　ッ　ト　12	円　　形	0.42 × 0.34	9.7	灰色砂質土	
落　ち　込　み					
落ち込み 1	不　整　形	5.7　× 1.1	25.6	暗褐色混礫粘質土	弥生土器
落ち込み 2	不　整　形	0.68 × 0.46	8.9	暗灰褐色粘質土	土師器・弥生土器・石器
落ち込み 3	不　整　形	2.06 × 0.7	20.5	暗褐色混礫粘質土	
落ち込み 4	不　整　形	0.9　× 2.2	24.0	暗褐色混礫粘質土	

表 3　土壙・ピット・落ち込み一覧表


自然流路
第5トレンチ
第7トレンチ
第3トレンチ
第4トレンチ
第6トレンチ
第2トレンチ
第1トレンチ
土壙12
ピット3
溝1
溝2
土壙4
土壙5
土壙3
ピット12
ピット11
土壙9
土壙6
ピット10
ピット9
ピット8
ピット7
落ち込み3
落ち込み1
ピット5
土壙8
ピット2
ピット6
土壙2
甕棺墓
土壙1
土壙10
ピット4
土壙11
土壙7
落ち込み2
ピット1
N.W.
0
10m

挿図7　遺構平面図



挿図８　甕棺墓平面図・断面図

甕 棺 墓

調査区第２トレンチ西端部中央で検出した。長径2.64ｍ、短径86cmの双円形のプランを呈する掘り方を有する。甕棺は南側に埋納されており、北側の深さが10cmを測るのに対して、納棺部は28cmと深い。後世の削平を受け棺上面が破損している。

埋土は、上下２層に分かれる。上層には暗灰褐色混礫粘質土が厚さ約20cm堆積する。甕棺の内外とも同じ埋土である。下層には炭片を含む暗褐色混礫粘質土が厚さ約８cm堆積する。埋土上層中にサヌカイト製石器と弥生土器、および縄文土器が含まれている。

甕棺は南に口縁部を向け約50度の傾きをもって安置されていた。口径37.5cm、底径10.0cm、器高56.5cmを測る甕に壺の上半部を欠き、逆さにして蓋に転用し、甕口縁に壺腹部が接する様に使用されていた。壺の腹径は49cmを測る。副装品は認められなかった。　(中辻　亘)

V　出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、須恵質土器、瓦質土器、陶磁器、石器、瓦などがある。それらは細片が多く、また出土量も少ない。その大半が包含層および整地層から出土したもので、遺構から出土したものは表５に示したとおりである。以下、土器類と石器類について図示したものを遺構毎に観察する。

1　土器類

自然流路（挿図９　図版16　(1)～(4)）

弥生土器(1)

厚ぼったい平底で、底径9.5cm、残存器高3.5cmをはかる。調整は内外面とも磨滅のため不明。胎土は粗く、0.1～0.5cmの石英を多量に含む。色調は淡赤褐色。

須恵器(2)～(4)

有蓋高杯蓋(2)

つまみ径3.0cm、つまみ高0.9cm、残存器高2.2cmをはかる。口縁部は欠失している。天井部中央には基部の太い上面凹状のつまみが貼付けられている。調整は天井部外面回転ヘラ削り、内面およびつまみ部は回転ナデ。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。胎土は精良。色調は暗青灰色。焼成は良好で堅緻。

杯蓋(3)

口径11.1cm、器高3.8cmをはかる。天井部から口縁部にかけてゆるやかな丸みをもってくだる。口縁部は開き、端部は丸くおさまる。天井部と口縁部を分ける凹線も稜も認められない。天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデ。天井部内面中央は回転ナデのあと不定方向のナデ。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。胎土は精良。色調は青灰色。焼成は良好で堅緻。

杯身(4)

口径13.0cm、受部径15.4cm、たちあがり高0.9cm、残存器高2.3cmをはかる。たちあがりは内傾したのち、わずかに直立する。端部は丸くおさまる。受部はわずかに上方にのび、端部は丸くおさまる。調整は底部外面が回転ヘラ削り、他は内外面とも回転ナデ。胎土は良質。色調は白灰色。焼成は良好で堅緻。

溝１（挿図９　図版16　(5)(6)）

須恵器(5)(6)

遺　構	弥生土器	土師器	須恵器	瓦器	土師質土器	須恵質土器	瓦質土器	石器	そ の 他
自然流路	○	○	○					○	木片、砂岩（敲き石）
溝 1		○	○					○	
溝 2		○	○					○	
半田溝 1			○		○				
半田溝 2		○	○						
半田溝 3	○	○	○					○	不明石、磁器、瓦、焼土塊
半田溝 4		○							磁器
半田溝 5		○		○					磁器
半田溝 6		○							
土　壙　1	○							○	
土　壙　2	○								
土　壙　3								○	
土　壙　4								○	
土　壙　5	○		○					○	
土　壙　6		○	○						
土　壙　7		○							
土　壙　8	○	○	○	○				○	
落ち込み 1	○								
落ち込み 2	○	○						○	
ピット 1	○							○	
ピット 2		○	○						
ピット 3		○							
ピット 4		○	○						瓦
ピット 5		○		○					
甕棺墓	○							○	縄文土器

表 4　各遺構出土遺物一覧表

杯身(5)(6)

(5)　口径9.0cm、受部径11.1cm、たちあがり高0.5cm、残存器高2.3cmをはかる。たちあがりは内傾したのち、わずかに直立する。端部は尖り気味。受部はわずかに上方にのび、端部は丸くおさまる。調整は内外面とも回転ナデ。胎土は良質。色調は灰色。焼成は良好で堅緻。

(6)　口径11.6cm、受部径13.0cm、たちあがり高1.0cm、残存器高2.3cmをはかる。たちあがりは直立気味にのびる。口縁端部は尖り気味。受部は水平にのびるが、端部でわずかにくだる。調整は内外面とも回転ナデ。外面は自然釉が剝離してあれている。胎土は良質。色調は淡青灰色。焼成は良好で堅緻。

土壙 6　（挿図 9　(6)(7)）

土師質土器 (7)

皿 (7)

口径11.1cm、残存器高2.0cmをはかる。口縁部は受口状にのび、端部は丸くおさまる。調整は内外面ともヨコナデ。胎土は良質。色調は黄赤褐色。

落ち込み1（挿図9　(8)）

弥生土器(8)

底部(8)

底径4.6cm、残存器高2.7cmをはかる。平底。調整は内外面とも磨滅のため不明。胎土は粗く、0.1～0.2cmの石英を多量に含む。色調は乳赤茶色。

ピット1（挿図9　図版16　(9)）

弥生土器(9)

鉢形土器(9)

口径28.2cm、残存器高12.1cmをはかる。椀状に近い体部に、わずかに内湾する口縁部をもつ。口縁端部は内外に肥厚する。口縁部外面には3条の凹線文が施されている。調整は内外面とも磨滅のため不明。胎土は精良で、わずかにくさり礫を含む。色調は乳黄茶色。

甕棺墓（挿図9・10　図版16　(10)～(14)）

弥生時代中期の甕棺墓であるが、埋土の中に縄文土器、前期弥生土器、中期弥生土器が混入していた。

甕棺(13)(14)

甕形土器(14)

口径37.5cm、底径10.0cm、器高56.5cmをはかる。くの字に屈曲する頸部。縁部は上・下に拡張する。口縁端部下端に刻み目を施す。調整は口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半は不定方向の刷毛目。下半は縦方向の刷毛目。底部外面は縦方向のヘラミガキ。外底面は磨滅のため調整不明。体部内面はナデ。内底面には指頭圧痕が多く残る。胎土は精良で、石英、くさり礫を含む。色調は淡黄茶色。体部外面に一部、黒班が認められる。

壺形土器(13)

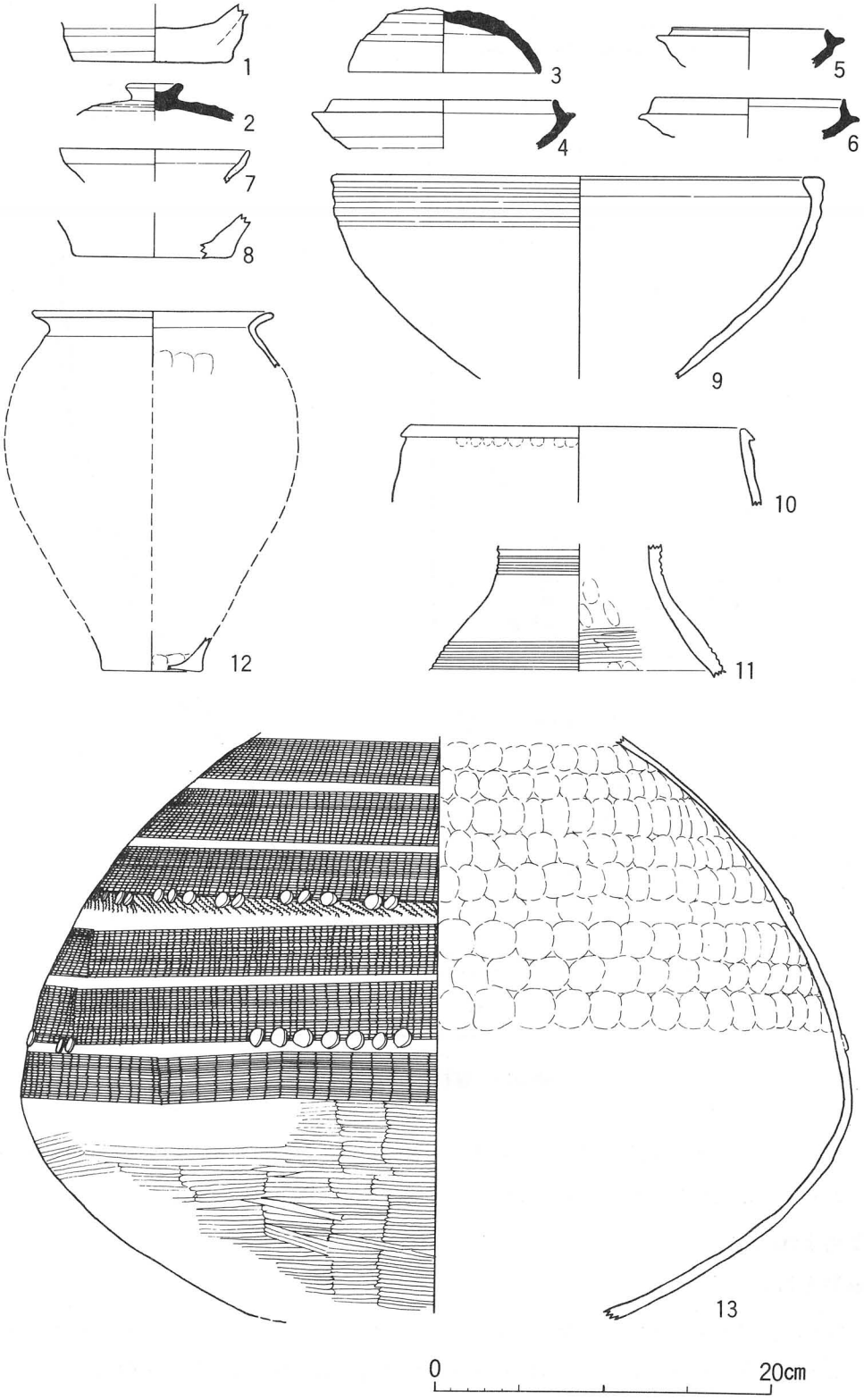
埋葬時には口頸部を打ち欠いて蓋として使用していた。体部下半に最大径をもつ。体部外面は原体幅が20～30本の櫛状工具で簾状文を6条、原体幅20本の櫛状工具で列点文を1条施した上に円形浮文を貼付けている。調整は体部外面横方向のヘラミガキ、内面上半は磨滅のため調整不明であるが、指頭圧痕が残る。下半はナデ調整。胎土は生駒西麓産。色調は茶褐色。

埋土内土器(10)～(12)

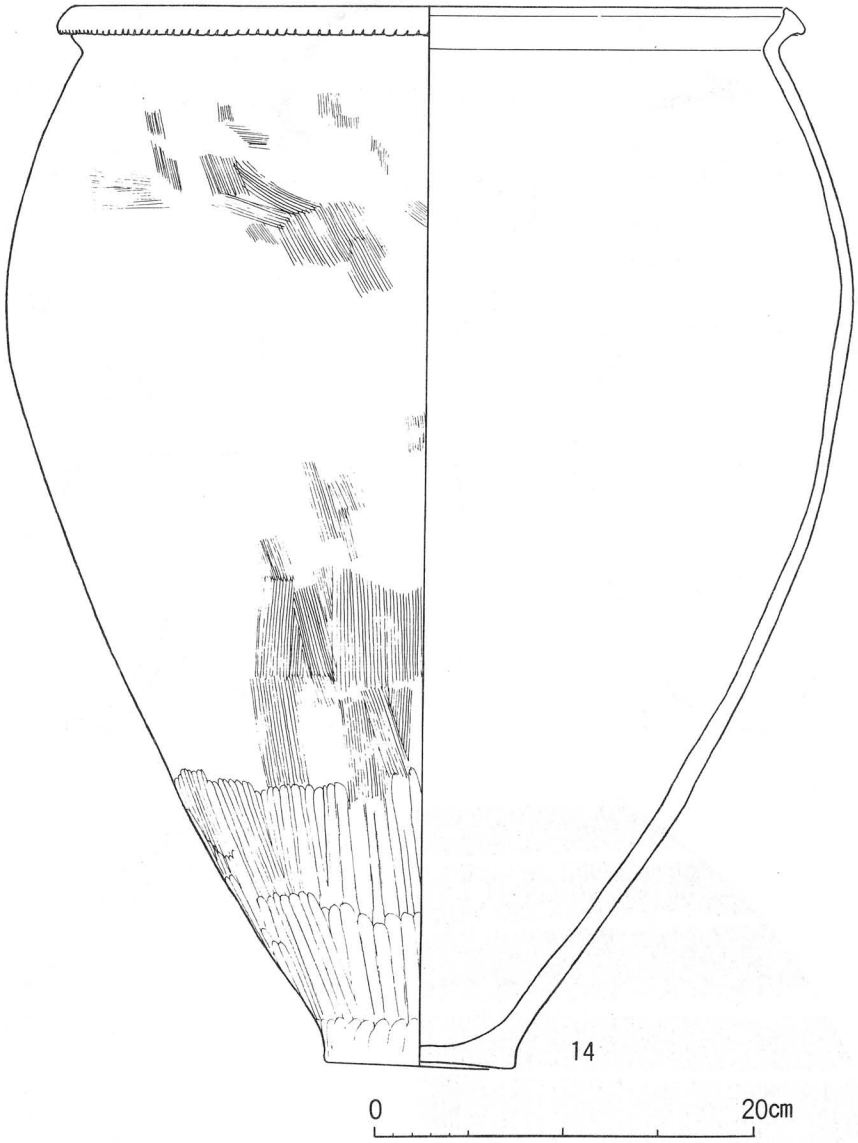
縄文土器(10)

深鉢形土器(10)

口径19.8cm、残存器高4.6cmをはかる。口縁部と体部上半残存。内傾する口縁部。口縁端部



挿図９　自然流路、溝１、土壙６、落ち込み１、ピット１、甕棺墓出土土器



挿図10　甕棺墓出土土器

はわずかに下方に肥厚する。内外面とも磨滅が著しいため調整は不明。口縁部下端に刻み目があったかどうかはわからない。胎土は粗く、生駒西麓産。色調は暗茶褐色。

弥生土器(11)(12)

壺形土器(11)

口縁部から体部上半にかけて残存。頸部から体部にかけてなだらかにくだる。頸部には4条以上の沈線、体部には5条以上の沈線が施されている。外面は剝離のため調整不明。内面は頸部がナデ、体部は横方向のヘラミガキ。頸部から体部にかけて指頭圧痕が残る。胎土はやや粗

く、石英や金雲母が目立つ。色調は淡黄褐色。

甕形土器(12)

口径13.9cm、底径5.6cmをはかる小型の甕形土器である。くの字に外反する口縁部。口縁端部は丸くおさまる。調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部および底部の外面は調整不明。内面はナデ、一部に指頭圧痕が残る。胎土は生駒西麓産。色調は茶褐色。

包含層および整地層（挿図11　図版16　(11)～(62)）

弥生土器(15)

底部(15)

底径7.1cm、残存器高3.3cmをはかる。平底。調整は内外面とも磨滅のため不明。胎土は粗い。色調は暗褐色。第5トレンチ第3層出土。

須恵器(16)～(20)

杯蓋(16)

口径12.3cm、残存器高4.3cmをはかる。口縁部はほぼ垂直に下り、口縁端部は凹む。口縁部と天井部の境は明瞭に段がつく。天井部は比較的高い。調整は天井部外面が回転ヘラ削り、その他は内外面とも回転ナデ。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左まわり。胎土は良質。色調は青灰色。焼成は良好で堅緻。第1層出土。

杯身(17)

口径11.9cm、受部径14.2cm、たちあがり高0.8cm、残存器高3.2cmをはかる。口縁部は内傾してたちあがる。口縁端部は丸くおさまる。調整は内外面とも回転ナデ。たちあがりはオリコミによる。体部外面は自然釉が剝離してあれている。胎土は良質。色調は灰色。焼成は良好で堅緻。第3トレンチ第8層出土。

つまみ(18)

つまみ径3.6cm、つまみ高1.0cm、残存器高1.8cmをはかる。基部が太く上面が浅い凹状のつまみ。調整は内外面とも回転ナデ。胎土は良質。色調は白青灰色。焼成は良好で堅緻。
第1トレンチ第2層出土。

高杯(19)

脚部下半のみ残存。裾部径12.9cm、残存器高3.1cmをはかる。なだらかに開く裾部。裾端部は凹面を呈し、内端で接地する。透しがあるが、形、大きさとも不明。調整は内外面とも回転ナデ。胎土は良質。色調は青灰色。焼成は良好で堅緻。第4トレンチ第6層出土。

短頸壺(20)

口径19.3cm、残存器高4.0cmをはかる。口縁部は外傾して開き、端部は丸くおさまる。調整は内外面とも回転ナデ。胎土は良質。色調は灰青色。焼成は良好で堅緻。第5トレンチ第8層

出土。

土師質土器(21)～(45)

小皿(21)～(36)

口縁部から丸みをもちながら底部にいたるもの(21)～(29)、口縁部と底部が明瞭に角ばって分かれるもの(30)～(35)、２段階に大きく開くもの(36)がある。調整は(26)が内外面ともヨコナデ、(32)の口縁部内外面にナデが観察できる以外はすべて磨滅のため調整不明。法量および出土地は以下のとおりである。

(21)　口径6.3cm、器高1.2cm、出土地は不明。

(22)　口径6.4cm、残存器高1.6cm、第５トレンチ第７層出土。

(23)　口径8.2cm、残存器高1.3cm、第３トレンチ第６層出土。

(24)　口径7.4cm、器高1.5cm、第５トレンチ出土。

(25)　口径6.9cm、器高0.8cm、出土地不明。

(26)　口径6.2cm、器高0.8cm、第５層出土。

(27)　口径7.9cm、残存器高1.2cm、第５トレンチ第７層出土。

(28)　口径6.4cm、残存器高1.1cm、第５層出土。

(29)　口径7.3cm、残存器高1.1cm、第５層出土。

(30)　口径7.8cm、残存器高1.2cm、第５トレンチ第３層出土。

(31)　口径7.0cm、器高1.2cm、第５トレンチ第６層出土。

(32)　口径7.7cm、器高1.3cm、第５トレンチ出土。

(33)　口径7.8cm、残存器高1.1cm、第５トレンチ出土。

(34)　口径7.2cm、残存器高0.8cm、第４トレンチ第６層出土。

(35)　口径7.1cm、残存器高1.1cm、第５層出土。

(36)　口径10.4cm、残存器高0.8cm、第１トレンチ第４層出土。

皿(37)～(41)

浅い皿(37)(40)と深めの皿(38)(39)(41)とがある。すべて口縁部は丸くおさまるが、(39)は丸く肥厚する。調整は(41)の内外面にヨコナデが観察できるが、他はすべて磨滅のため不明である。法量および出土地は以下のとおりである。

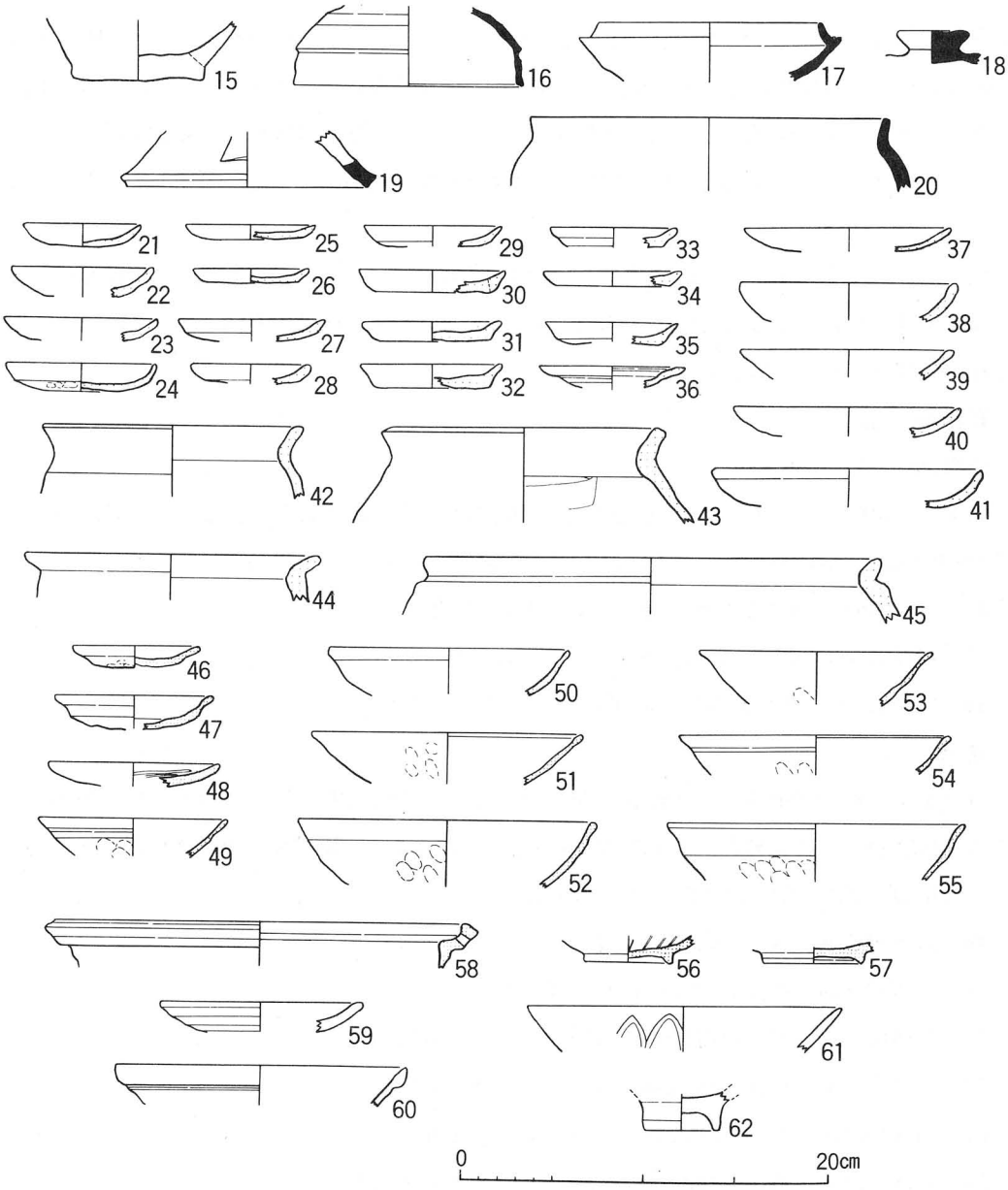
(37)　口径11.0cm、器高1.3cm、第４トレンチ第６層出土。

(38)　口径11.5cm、残存器高2.1cm、第５トレンチ第７層出土。

(39)　口径11.2cm、残存器高1.6cm、第５トレンチ第６層出土。

(40)　口径12.2cm、残存器高1.6cm、第５トレンチ第６層出土。

(41)　口径14.4cm、残存器高2.1cm、第４トレンチ第６層出土。



挿図11　包含層および整地層出土土器

甕形土器(42)～(45)

(42)　口径13.8cm、残存器高4.9cmをはかる。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上端で平坦になる。体部はあまり張り出さない。調整は内外面とも磨滅のため不明。胎土は良質。色調は赤黄色。第５トレンチ出土。

(43)　口径14.2cm、残存器高5.2cmをはかる。くの字に外反する口縁部。口縁端部は上端で外傾

する。体部は大きく張り出す。調整は口縁部内外面ともヨコナデ。他は磨滅のため不明。体部内面にはヘラのあたりが認められる。胎土は良質。色調は赤褐色。第3トレンチ第6層出土。

(44) 口径15.8cm、残存器高3.6cmをはかる。屈折して大きく開く口縁部。口縁端部は丸くおさまる。調整は内外面とも磨滅のため不明。胎土はやや粗。色調は赤茶色。第6トレンチ第7層出土。

(45) 口径24.4cm、残存器高3.1cmをはかる。肩部で段をつけたのち屈折して開く口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。調整は口縁部内外面ともヨコナデ。体部内外面ともナデ。胎土はやや粗。色調は赤茶色。第5トレンチ第6層出土。

瓦器 (46)～(57)

小皿 (46)～(48)

体部から屈折して大きく開く口縁部をもつ(46)(47)とゆるやかに開く口縁部をもつ(48)がある。(48)は内面に暗文が認められる。法量および出土地は以下のとおりである。

(46) 口径6.8cm、器高1.2cm、第4トレンチ第6層出土。

(47) 口径8.5cm、器高1.9cm、第6トレンチ第7層出土。

(48) 口径9.4cm、残存器高1.3cm、第3トレンチ第6層出土。

椀 (49)～(57)

外反気味に開く口縁部をもつ(50)(53)～(55)とゆるやかに外傾気味に開く口縁部をもつ(51)(52)がある。(56)(57)は底部のみ残存。口縁端部はすべて丸くおさまる。(56)は見込みに平行線の暗文がある。法量および出土地は以下のとおりである。

(49) 口径10.1cm、残存器高2.1cm、第5トレンチ第6層出土。

(50) 口径12.8cm、残存器高2.6cm、出土地不明。

(51) 口径14.5cm、残存器高2.8cm、第5トレンチ第5層出土。

(52) 口径16.1cm、残存器高3.6cm、第3トレンチ第6層出土。

(53) 口径10.4cm、残存器高2.9cm、第5トレンチ第6層出土。

(54) 口径14.3cm、残存器高2.1cm、第4トレンチ第6層出土。

(55) 口径16.0cm、残存器高3.1cm、第6トレンチ第6層出土。

(56) 底径4.8cm、高台高0.5cm、残存器高1.5cm、第5トレンチ第7層出土。

(57) 底径5.2cm、高台高0.6cm、残存器高1.2cm、第5トレンチ第7層出土。

鉢 (58)

口径21.8cm、残存器高2.5cmをはかる。口縁部は受口状を呈す。口縁端部は内側へわずかに肥厚する。口縁部には円孔が穿たれているが、数は不明。調整は内外面とも磨滅のため不明。全面に煤が付着している。胎土は精良。色調は灰色。第3トレンチ第6層出土。

白磁(59)(60)

皿(59)

口径10.8cm、残存器高1.6cmをはかる。口縁端部は丸くおさまる。口縁部内外面、体部内面はヨコナデ。体部外面はナデが強いため稜線になってあらわれている。釉薬は少し黄色っぽい。第5層出土。

鉢(60)

口径15.6cm、残存器高2.2cmをはかる。口縁部は断面三角形状を呈す。第5トレンチ第7層出土。

青磁(61)(62)

椀(61)(62)

(61) 口縁部のみ残存。口径17.0cm、残存器高2.5cmをはかる。口縁端部は尖り気味である。外面には蓮弁文が施されている。第5トレンチ第6層出土。

(62) 底部のみ残存。高台径4.0cm、高台高0.8cm、残存器高2.1cmをはかる。高台は垂直に下り、畳付は平らである。高台内面は無釉である。第5層出土。

2．石器類

打製石器として石鏃、石錐、石槍、不定形刃器などがある。その他に剥片、石核、未製品なども認められる。それらはすべてサヌカイト製である。サヌカイト製の石器以外に、数点であるが砂岩製の敲き石もある。石器類の観察にあたって便宜的に左側をA面、右側をB面として記述する。なお、観察の中にA面、B面と特に記述していない場合はA面側からみたものである。

自然流路（挿図12・13　図版17　(1)～(5)）

石槍(1)(2)

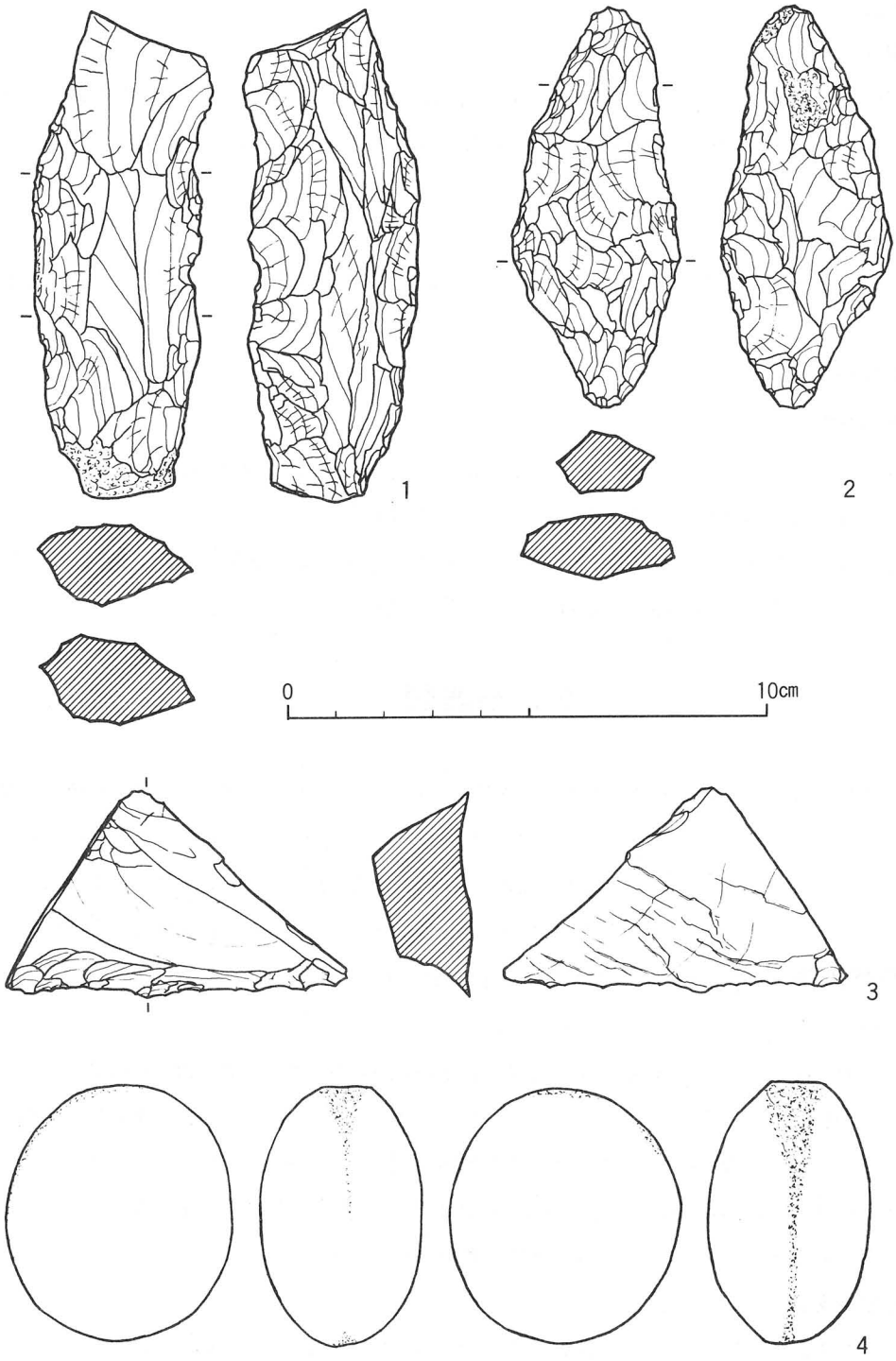
(1) 残存長10.2cm、幅3.5cm、厚さ1.7cm、重量78.9gをはかる。側辺は右側がふくらみ、左側がほぼ直線的にのびる。基辺は右上がり。先端は欠失している。両面とも側辺から調整剥離を施している。A面基部から基端にかけて自然面が残る。第1層出土。

(2) 長さ8.4cm、幅3.5cm、長さ1.3cm、重量41.8gをはかる。木の葉状を呈す。B面先端左側辺は自然面が残る。両面とも側辺から調整剥離を施している。第1層出土。

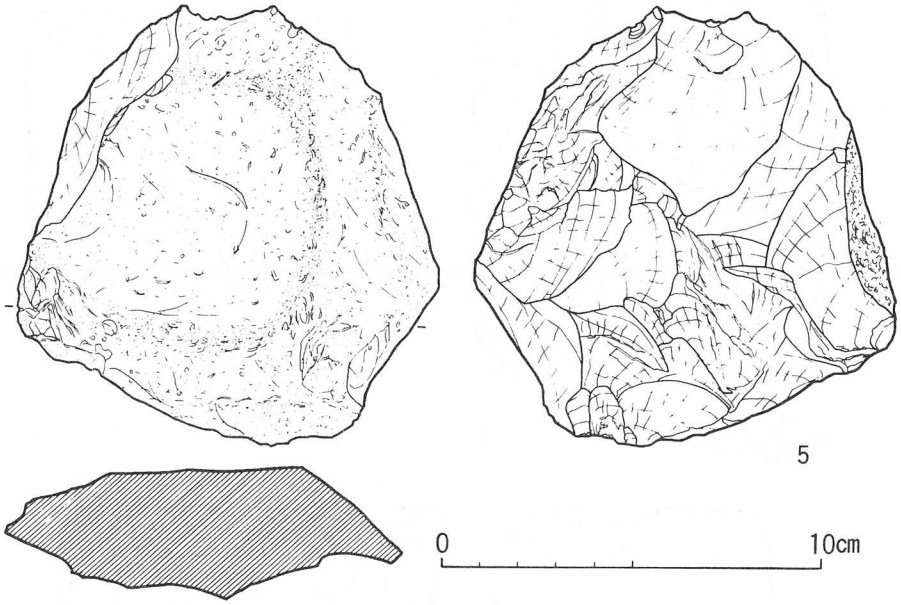
不定形刃器(3)

長さ4.3cm、幅7.1cm、厚さ1.8cm、重量52.7gをはかる。三角形状を呈す。A面下辺に刃部を作り出している。左側辺に自然面が残る。第3層出土。

石核(5)



挿図12　自然流路出土石器



挿図13　自然流路出土石器

長さ11.5cm、幅10.9cm、厚さ3.4cm、重量660.0ｇをはかる。円形を呈す。Ｂ面に剝片のはぎ取り面がある。剝片は四方から取ったらしく、剝離面に不定方向の打点が残っている。第１層出土。

敲き石(4)

砂岩製の敲き石。長さ5.5cm、幅4.9cm、厚さ3.4cm、重量121.0ｇをはかる。楕円形を呈す。上面および側面に敲打痕がある。第１層出土。

溝２（挿図14　図版17　(6)）

石槍(6)

残存長8.1cm、幅3.3cm、厚さ1.0cm、重量29.8ｇをはかる。側辺はほぼ直線状にのびる。基辺は丸みをもつ。先端部は欠失している。両面とも側辺から調整剝離を施している。

土壙３（挿図14　図版17　(7)）

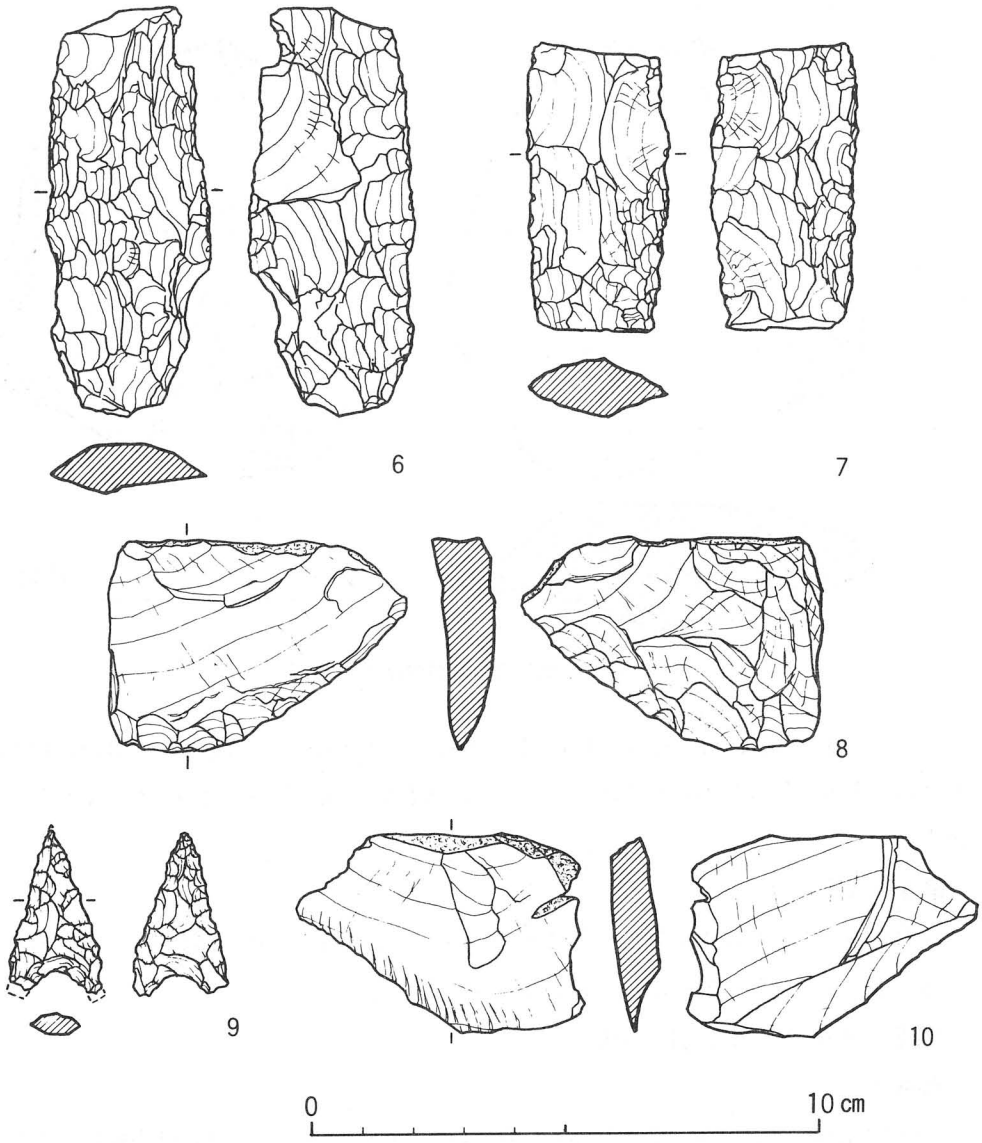
石槍(7)

残存長5.7cm、幅2.8cm、厚さ1.2cm、重量25.1ｇをはかる。側辺はほぼ直線上にのびる。基部、先端部ともに欠失している。両面とも側辺から調整剝離を施している。

ピット１（挿図14　図版17　(8)）

不定形刃器(8)

長さ4.2cm、幅5.9cm、厚さ1.1cm、重量26.6ｇをはかる。三角形状を呈す。両面とも下辺に刃部を作り出している。上面には自然面が残っている。



挿図14　溝２、土壙３、ピット１、甕棺墓出土石器

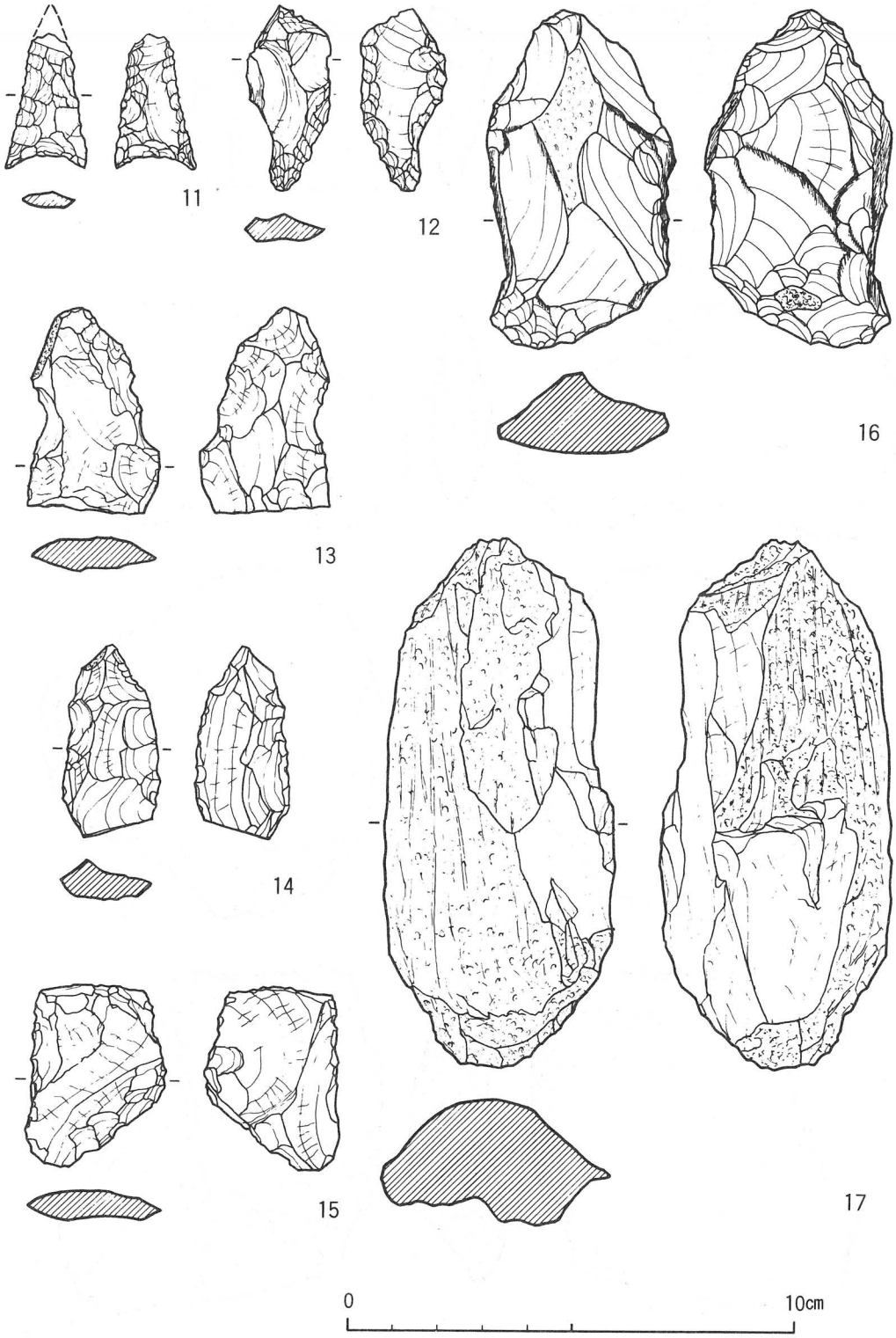
甕棺墓（挿図14　図版17　(9)(10)）

石鏃(9)

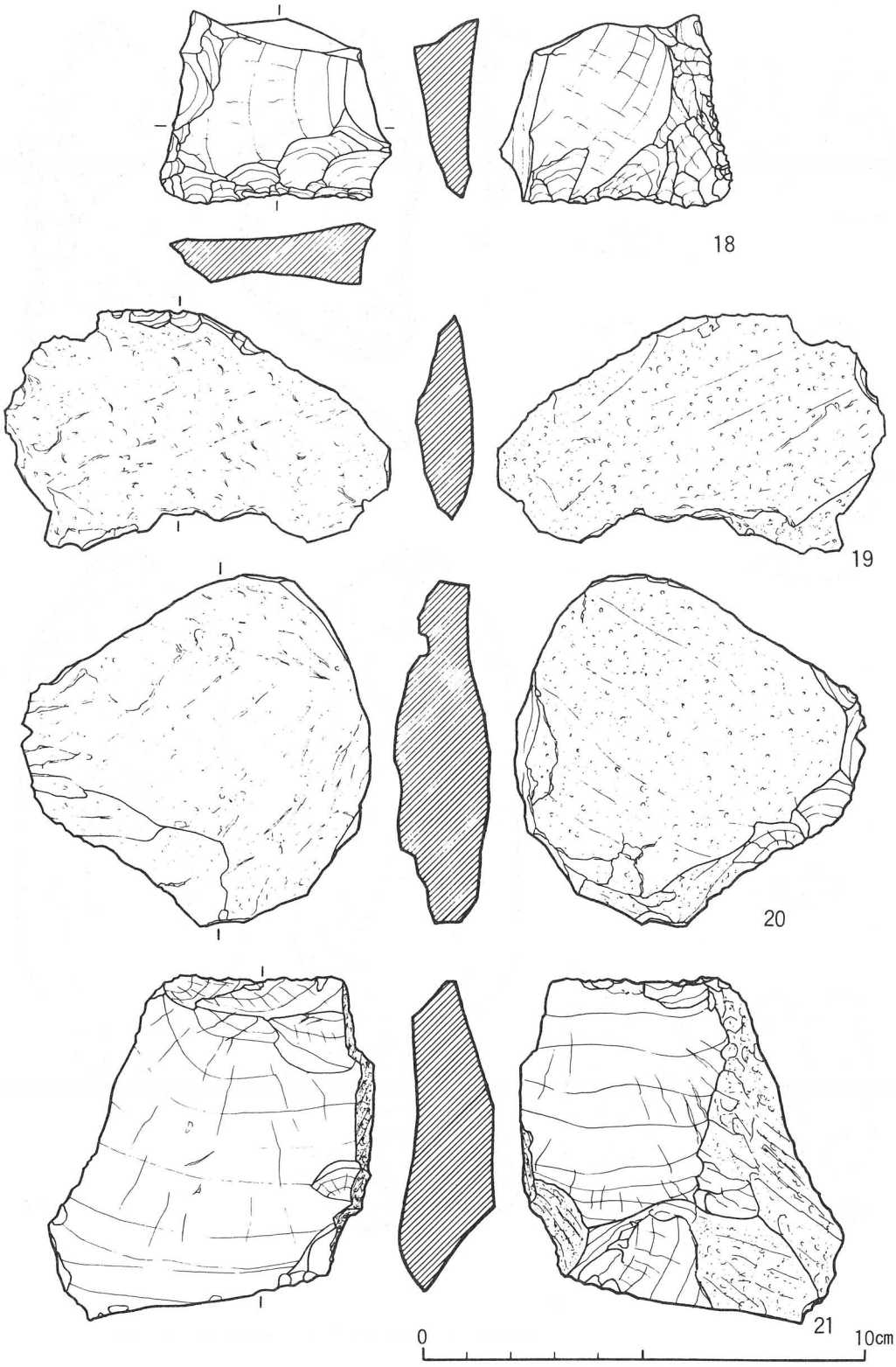
長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量2.4ｇをはかる。凹基式の石鏃。側辺は直線的にのびる。基部は深いU字状を呈す。逆刺は端部が欠失しているため形状は不明。先端部もわずかに欠失している。周辺から調整剥離を施している。

剥片(10)

長さ5.5cm、幅3.9cm、厚さ0.9cm、重量23.0ｇをはかる。A面は主要剥離面。打面は自然面。



挿図15　包含層および整地層出土石器



挿図16　包含層および整地層出土石器

包含層および整地層（挿図15・16　図版17　(11)～(21)）

石鏃(11)

長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重量1.6ｇをはかる。凹基式の石鏃。側辺は直線的にのびる。基部は浅い。逆刺は鋭くとがる。周辺から調整剥離を施しているが、Ｂ面中央右寄りに大剥離面が残る。第５トレンチ第８層出土。

石錐(12)

長さ4.1cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重量5.5ｇをはかる。錐部は頭部の下端をすぼめた状態で作り出しているが、先端は尖っていない。石錐として分類したが、石鏃の未製品の可能性も高い。側辺から調整剥離を施しているが、Ｂ面中央に大剥離面が残る。出土地は不明。

未製品(13)～(16)

(13)　長さ4.6cm、幅2.9cm、厚さ0.7cm、重量12.3gをはかる。先端部に自然面が残る。基辺は打ち落とし面。第５トレンチ第８層出土。

(14)　長さ4.2cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm、重量7.6gをはかる。Ａ面先端部左辺、Ｂ面右側下辺に自然面が残る。第５層出土。

(15)　長さ4.1cm、幅3.0cm、厚さ0.7cm、重量10.8gをはかる。第５層出土。

(16)　長さ7.5cm、幅4.1cm、厚さ1.8cm、重量80.0gをはかる。周辺および、Ａ面中央部に自然面が残る。両面とも稜線部分が磨滅している。第５トレンチ第７層出土。

石核(17)

長さ11.9cm、幅5.2cm、厚さ2.7cm、重量232.0ｇをはかる。縦長の石核。第５トレンチ第７層出土。

不定形刃器(18)

長さ4.3cm、幅5.0cm、厚さ1.4cm、重量30.1ｇをはかる。両刃の刃器で、下辺と右辺に刃部を作り出している。上辺と左辺は打ち落とし面。表採。

剥片(19)～(21)

(19)　長さ5.1cm、幅8.4cm、厚さ1.3cm、重量68.2gをはかる。上辺と下辺にわずかに調整剥離が施されている。風化が著しい。第１トレンチ第２層出土。

(20)　長さ7.8cm、幅7.9cm、厚さ2.2cm、重量170.0gをはかる。Ｂ面右辺に調整剥離が施されている。風化が著しい。第１トレンチ第４層出土。

(21)　長さ7.5cm、幅6.8cm、厚さ2.1cm、重量139.5gをはかる。Ａ面は主要剥離面。打面は調整面。Ａ面右側辺とＢ面右辺から下半にかけて自然面が残る。Ｂ面の調整は３回程行なわれている。第２トレンチ第７層出土。

（粟田　薫）

Ⅵ　花粉分析

試料

近世の畝跡間の堆積土により4試料、東壁断面より5試料採取した。

試料1	半田溝4	試料5	第1層
2	半田溝5	6	第2・第3層
3	半田溝6	7	第4層
4	半田溝1	8	第5層
		9	第6層

試料1・2は黒色を呈し、炭化物に富む粘土を主とする。試料3・4は黒色～黄褐色の礫状土塊の集合した堆積物である。試料5～9は黒褐色～茶褐色のシルト混りの細砂で、連続した堆積物である。

方法

花粉分析は定量分析と相対分析を行なった。定量分析にあたり、従来より用いていた傾斜水洗法と傾斜法による方法及び塩化亜鉛を用いた重液法を検討し、その結果、最も検出状況の良好であった以下の方法を用いた。

1）試料に5％水酸化カリウム水溶液を加え、一昼夜放置する。

2）水洗を行なった後、傾斜法によって砂粒・鉱物粒の除去を行なう。

3）30％フッ化水素酸を加え、一昼夜放置する。

4）水洗を行なった後、アセトリシス処理を90℃で約1分間行なう。

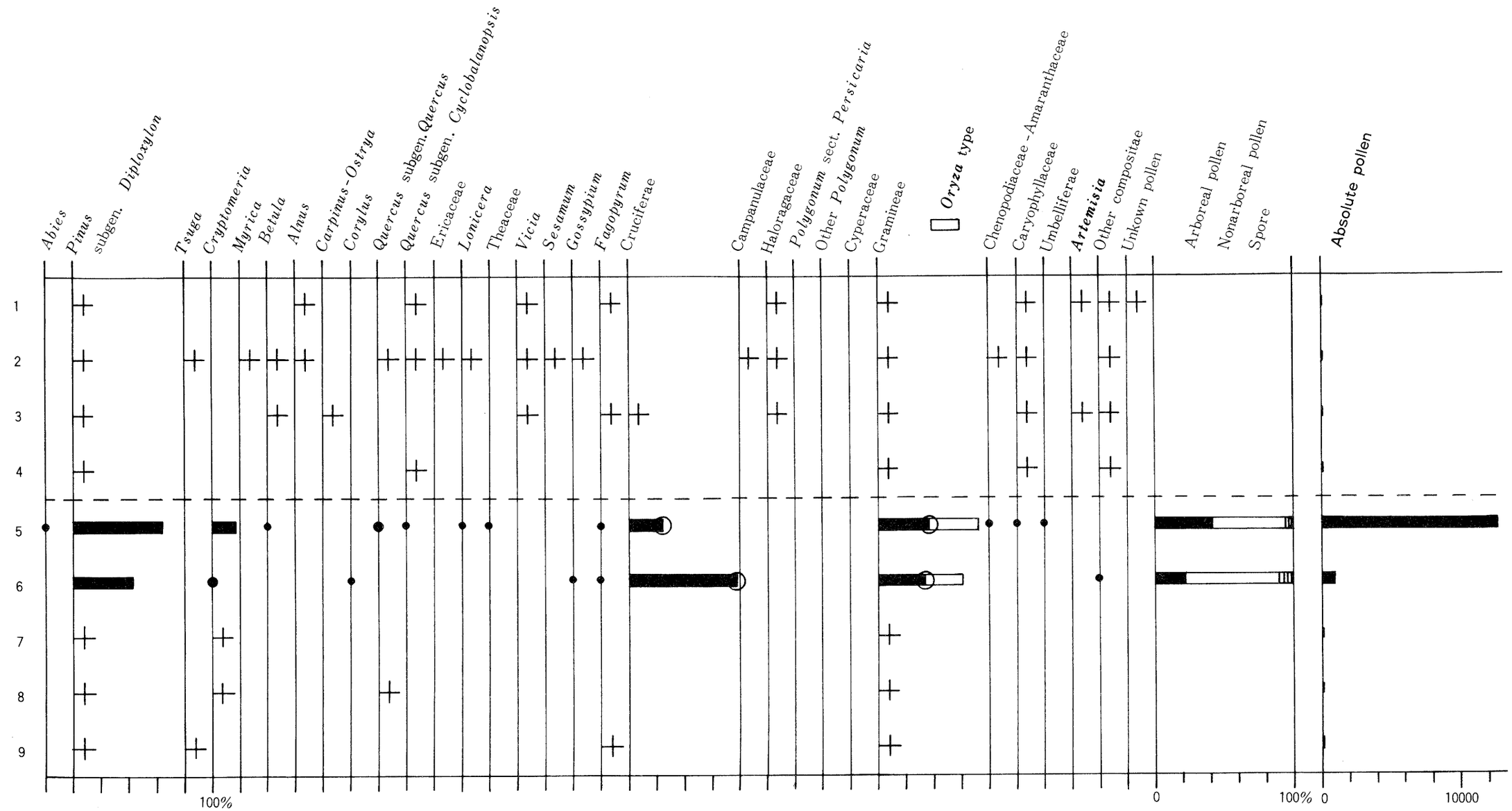
5）水洗を行ない、染色を施し、再び水洗した後、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製する。

水洗は遠心分離機を用いて数回行なう。

結果

この遺跡の試料より検出された花粉遺体は次のとおりである。

樹木花粉　*Pinus* subgen. *Diploxylon*（マツ属複維管束亜属），*Abies*（モミ属），*Tsuga*（ツガ属），*Cryptomeria*（スギ），*Myrica*（ヤマモモ属），*Betula*（カバノキ属），*Alnus*（ハンノキ属），*Carpinus-Ostrya*（クマシデ属），*Quercus* subgen. *Quercus*（コナラ属コナラ亜属），



●：1～2％ •：1％未満，＋出現
○：塊状で検出

挿図17　花粉ダイヤグラム

Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*（コナラ属アカガシ亜属），
Corylus（ハシバミ属），Ericaceae（ツツジ科），*Lonicera*（スイカズラ属），
Theaceae（ツバキ科）

草本花粉　Cyperaceae（カヤツリグサ科），Gramineae（イネ科），
Oryza type Gramineae（イネ属型花粉），*Polygonum*（タデ属），
Polygonum sect. *Persicaria*（タデ属サナエタデ節），
Chenopodiaceae-Amaranthaceae（アカザ科—ヒユ科），
Caryophyllaceae（ナデシコ科），Umbelliferae（セリ科），*Artemisia*（ヨモギ属），
Compositae（キク科），Haloragaceae（アリノトウグサ科），
Campanulaceae（キキョウ科），Cruciferae（アブラナ科），*Fagopyrum*（ソバ属），
Gossypium（ワタ属），*Sesamum*（ゴマ属），*Vicia*（ソラマメ属）

絶対花粉分析結果（挿図17）

試料1～4・7～9では試料1中に含まれる花粉遺体は100個以下と少なかった。試料5では12000個以上も含まれ、試料6では880個含まれていた。これらの絶対花粉の結果は、各試料の肉眼観察による淘汰と粒度組成との関係は見い出せない。それは耕地における特殊な堆積条件や花粉遺体の腐食溶解などの原因が考えられる。

相対花粉分析結果（挿図17）

試料5は、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）が多産し、スギも比較的多く産する。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科・アブラナ科が多産する。試料6は試料5とほぼ同じ傾向を示すが、アブラナ科は特に多く39%にもたっする。以上の2試料以外は花粉量が少なく、花粉組成を示すに致らなかった。

栽培植物について

イネ科とアブラナ科の花粉は栽培種が主体と考えられ、その高い割合からイネ科とアブラナ科の作物の集約的な栽培が推定される。他に栽培植物としてはソバ属・ワタ属・ソラマメ属・ゴマ属が検出された。

また、各試料とも多くの炭化した植物片を含んでいた。

（天理大学附属天理参考館　金原正明）

植生	栽培植物
マツ	イネ，アブラナ科作物
スギ	ソバ，ワタ，ソラマメ

表5　近隣の植生と栽培植物

Ⅶ まとめ

大阪府富田林市旭ケ丘町および喜志町３丁目に所在する喜志西遺跡は、1982年に近鉄南大阪線喜志駅西側の整備事業に伴い富田林市教育委員会が実施した試掘調査によって発見、周知された遺跡である。今回の調査で、更に遺跡の範囲が西方に拡がることが明らかとなった。

石川西岸の河岸段丘上に立地する本遺跡周辺には、羽曳野丘陵からの流水によって刻まれた小規模な谷が、その足跡を残していることが地形から読みとれる。1982年２月から４月にかけて富田林市教育委員会が実施した調査や1984年７月から８月にかけて大阪府教育委員会が実施した調査では、平安時代から鎌倉時代の遺物を含む自然流路が検出されており、上記の事実と一致する。(注１)

今回の調査区は、近鉄南大阪線喜志駅と国道 170号線とのほぼ中間地点にあたる。検出した遺構は、自然流路１、溝８、ピット12、落ち込み４、土壙12、甕棺墓１である。以下に調査結果をまとめてみることにする。

１．弥生時代中期の甕と壺を組み合わせた甕棺墓の検出は、調査区周辺に同時期の遺構が存在することを示す資料として貴重である。さらに、掘り方の埋土中に縄文時代晩期および弥生時代前期の土器を含んでいたことは、弥生時代中期以前にも何らかの生活の痕跡があったことを示す証拠として注目すべき点である。調査区北東方約400ｍに弥生時代中期以降の集落址である喜志遺跡が位置していることと考えあわせて、周辺地域の集落のあり方を再検討する必要がある。(注２) また、遺構の東側には自然流路が機能していたと思われ、流路が集落間の境界を示すものか、あるいは集落と墓域を画するものなのか、今後の周辺調査によって明らかにしていかなければならない。

２．古墳時代後期の遺物を埋土中に含む溝２条が自然流路にほぼ平行にあって、その機能が生産に伴うものか、あるいは集落に伴うものかは明確にはしがたいが、いずれにしても同時期の遺構が存在することが判明した。

３．中世の遺物を包含する第４層上面で検出した溝は、花粉分析の結果ともあわせて、綿作に関連した半田（掻揚田）の溝と判断される。(注３) 明和６年（1775年）の「喜志村様子明細帳」には、調査区周辺において河内木綿の生産が行われていたことが記載されており、(注４) 近世における在地商業の生産基盤を裏付ける資料として興味深いものがある。　　（中辻　亘）

（注１）小林義孝「喜志西遺跡発掘調査の記録」（大阪府文化財調査速報『節・香・仙』大阪府教育委員会文化財保護課，1984年11月）
（注２）北野耕平『富田林市史』第１巻（1985年３月）
（注３）福嶋雅蔵「富田林市域とその周辺の村様子明細帳」（『富田林市史研究紀要』第４号，1979年３月）
（注４）武部善人『河内木綿史』（1981年）

Ⅷ　佐備神社元宮司井上隆彦氏採集資料

佐備神社元宮司・井上隆彦氏によって採集された遺物が、このたび、佐備神社の御好意によって、富田林市教育委員会へ寄贈されることになった。そこで、それらの資料をここで紹介する。

採集された遺物は、須恵器、土師質土器、瓦器、須恵質土器、瓦質土器、備前焼、瓦などで多種におよんでいる。残念なことに、採集地、採集年月日のわかるものが数点しかなく、大半が採集地不明品である。以下、種類毎に記述する。

須恵器（挿図17　図版19）

有蓋高杯蓋(1)

口径12.8cm、つまみ径2.5cm、つまみ高0.4cm、器高4.0cmをはかる。口縁部は大きく開き、端部は丸くおさまる。天井部と口縁部の境の稜は短く丸い。天井部は低く、わずかに丸みをもつ。天井部中央には基部の太い上面凹面状の扁平なつまみが貼り付けられている。調整は天井部外面約⅔に回転ヘラ削りが施されているのを除いて、他はすべて回転ナデ。なお、天井部内面中央部には回転ナデの上から一定方向のナデが加えられている。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり、胎土は良質であるが、0.2～0.3cmの白色の小石が多く含まれている。色調は灰色。焼成は良好で堅緻。口縁部外面には煤の付着している箇所が認められる。採集地不明。

無蓋高杯(2)

口径12.5cm、裾部径9.3cm、杯部高4.4cm、脚部高5.8cm、器高10.2cmをはかる。口縁部は大きく開き、端部は丸くおさまる。体部には1条の凸線がめぐる。底部は丸みをもつ。脚部の基部は太く、裾部までなだらかに開く。裾端部は内傾して平坦な面を作り、内端部で接地する。脚部には長方形の透しが3方向に穿たれている。調整は杯部外面約⅔に回転ヘラ削りが施されているのを除いて、他は脚部も含めてすべて回転ナデ。回転ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。杯部内底面と裾端部近く外面は自然釉が剝離しているために器面のあれが目立つ。胎土は良質であるが、0.1～0.2cmの白色砂粒が含まれている。色調は灰色。焼成は良好で堅緻。採集地は土器に「東山横穴ニ於テ拾ヒシヲ落手ス」と注記されている。

無蓋高杯(3)

口径9.6cm、残存器高4.0cmをはかる。口縁部は大きく開きながら、端部近くで外反する。端部は尖る。体部には1条の凸線がめぐり、凸線下は列点文で飾られている。列点文の単位は22本で左方向に施文されている。脚部は欠失しているので全体の形はわからないが、3方向に透

しのある脚部であったことが接合部の痕跡からわかる。調整は杯底部外面¼が回転ヘラ削り、他はすべて内外面とも回転ナデ。なお、内底面には回転ナデの上から一定方向のナデが加えられている。胎土は良質であるが、0.1～0.2cmの白色砂粒が含まれている。色調は紫茶灰色。焼成は良好で堅緻。採集地不明。

壺(4)

口縁部と底部は欠失している。体部最大径12.0cm、残存器高6.4cmをはかる。体部は比較的扁平で、最大径を中位にもつ。体部下半にカキ目を施している。調整は外面底部近くが回転ヘラ削り、他は内外面とも回転ナデ。肩部外面に自然釉剝離のための器面のあれが目立つ。胎土は良質であるが、0.1cm程度の白色と黒色の砂粒が含まれている。色調は灰色。焼成は良好で堅緻。採集地不明。

土師質土器（挿図17　図版19）

小皿(5)～(7)

(5)　口径8.8cm、器高1.4cmをはかる。平らな底部から屈曲して外傾する口縁部をもつ。口縁部は短く、端部は丸くおさまる。調整は口縁部内外面ともヨコナデ。底部外面は未調整で、指頭圧痕が残る。内面は付着物があるため観察できない。胎土は良質。色調は暗赤褐色。採集地不明。

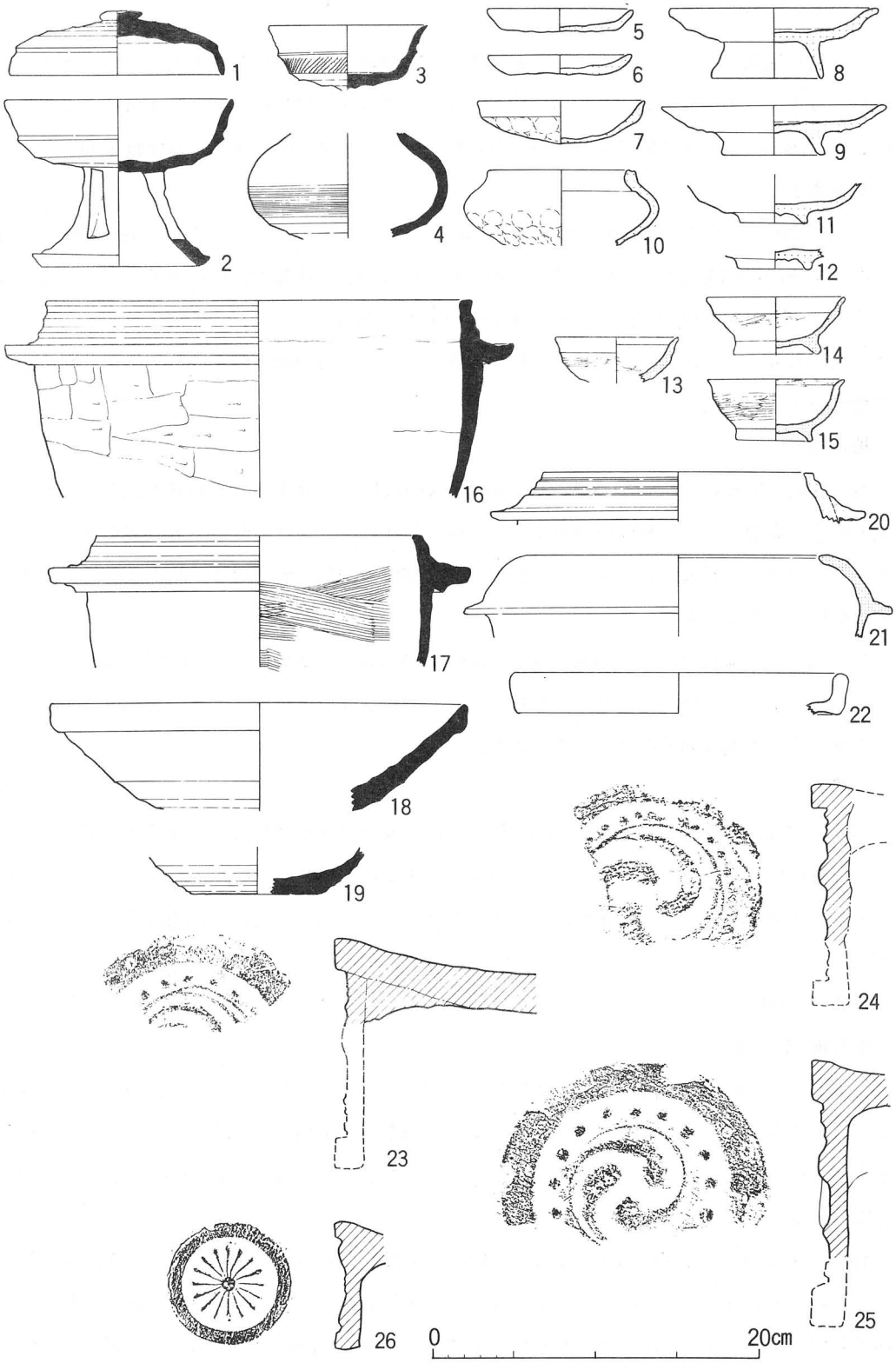
(6)　口径8.6cm、器高1.2cmをはかる。平らな底部からなだらかに開く口縁部をもつ。口縁部は短く、端部は丸くおさまる。調整は口縁部内外面、底部内面がヨコナデ。底部外面は未調整で指頭圧痕が残る。胎土に0.1cmの白色と黒色の砂粒、金雲母、0.1～0.2cmのくさり礫を多量に含む。色調は明赤褐色。採集地不明。

(7)　口径10.0cm、器高2.6cmをはかる。深く丸い底部から外傾してわずかに開く口縁部をもつ。口縁部は短く、端部は丸くおさまる。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、底部内面はナデ、外面は未調整で指頭圧痕が残る。胎土は良質。色調は灰黄色。採集地不明。

台付皿(8)(9)

(8)　口径12.5cm、裾部径6.8cm、皿部高2.1cm、台部高2.2cm、器高4.3cmをはかる。比較的浅く丸みをもつ底部から、なだらかにたちあがったのち、外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。台部は基部が太く、裾部までストレートに開く。裾端部は丸くおさまる。調整は口縁部、台部内外面ともヨコナデ。底部内面はナデ、外面は未調整で指頭圧痕が残る。台部は貼り付けによる。胎土は精良であるが、金雲母の微砂粒を含む。色調は明黄褐色。皿部外面の一部には炭化物質が付着している。採集地不明。

(9)　口径13.5cm、裾部径6.3cm、皿部高1.7cm、台部高1.35cm、器高3.05cmをはかる。平らな底部から外傾して大きく開く口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。台部は基部の太い脚部が、



挿図18　佐備神社元宮司井上隆彦氏採集資料

くの字状に屈曲して開き、端部で丸くおさまる。調整は口縁部、台部内外面ともヨコナデ。底部内面はナデ。外面は未調整で指頭圧痕が残る。台部は貼り付けによる。胎土は精良であるが、0.1～0.2cmの白色、黒色砂粒と金雲母の微砂粒を含む。色調は明黄褐色。採集地不明。

短頸壺(10)

口径8.1cm、最大腹径11.8cm、残存器高4.9cmをはかる小型の短頸壺である。扁平な体部にほぼ直立する口縁部をもつ。口縁端部は上面でわずかに凹む。体部中位に最大部をもつ。底部は欠失している。調整は口縁部内外面、体部外面上半、内面がヨコナデ。体部下半は未調整で指頭圧痕が残り、凹凸が著しい。胎土は精良であるが、金雲母の微砂粒を含む。色調は明黄赤色。採集地不明。

椀(11)(12)

(11) 高台径3.8cm、高台高0.6cm、残存器高2.5cmをはかる。体部下半から底部にかけて残存。丸みをもつ底部。高台は断面四角形で、外へ開き気味に貼り付けられている。調整は高台部内外面がヨコナデ、底部内面はナデ。底部外面は未調整で指頭圧痕が残る。胎土は良質。色調は明黄褐色。採集地不明。

(12) 高台径4.6cm、高台高0.5cm、残存器高1.3cmをはかる。高台部および底部が残存。高台は断面四角形で、ほぼ垂直に貼り付けられている。調整は高台部がヨコナデ。底部内外面はナデ。胎土は良質。色調は明黄褐色。採集地不明。

羽釜(20)

口径16.2cm、鍔部径22.5cm、鍔部幅1.1cm、残存器高3.1cmをはかる。口縁部は内傾して段をもつ。端部は上端で平坦な面をもつが、内端をわずかに肥厚させている。鍔は薄く、ほぼ水平に付き、端部は丸みをもつ。調整は内外面ともヨコナデ。胎土は良質。色調は黄茶色。採集地不明。

瓦器（挿図17　図版19）

小型椀(13)～(15)

(13) 口径7.2cm、残存器高2.8cmをはかる。丸みをもつ底部からなだらかにたちあがり、口縁端部近くで外反する。口縁端部は丸くおさまる。調整は口縁部内外面がヨコナデ。他は内外面ともナデを施しているが、一部横方向のヘラミガキも施している。胎土は良質。色調は灰黒色。採集地不明。

(14) 口径8.2cm、高台径5.0cm、高台高0.4cm、器高3.5cmをはかる。丸みをもつ底部から、なだらかにたちあがったのち、段をもって外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。断面四角形の太い高台は、ハの字状に貼り付けられているため、内端面で接地する。調整は口縁部内外面、高台部内外面ともヨコナデ。体部内外面とも横方向のヘラミガキ。ただし、内面のヘ

ラミガキは全体に施していない。他はナデ調整。胎土は精良であるが、金雲母の微砂粒を多量に含む。色調は黒色。採集地不明。

⑮　口径8.1cm、高台径4.2cm、高台高0.5cm、器高3.7cmをはかる。丸みをもつ底部から曲線を描きながらたちあがったのち、口縁部近くで大きく外反する。口縁端部は尖り気味。断面四角形の高台は開き気味に貼り付けられている。調整は口縁部外面、底部外面、高台部内外面、体部内面はヨコナデ。底部内面には一定方向のナデが施されているが、ナデ下には指頭圧痕が残る。口縁部内面と体部外面には横方向のヘラミガキが施されている。胎土は精良。色調は黒色。採集地不明。

須恵質土器（挿図17　図版20）

羽釜⑯⑰

⑯　口径25.6cm、鍔部径31.0cm、鍔幅2.1cm、残存器高11.9cmをはかる。口縁部は段をもち、ほぼまっすぐにたちあがる。端部は肥厚して丸みをもつ。鍔は厚く、ほぼ水平に付くが、端部で上方へわずかにつまみあげている。端部は丸くおさまる。鍔部下面には貼り付け時にできたと思われる突起が認められる。体部はストレートにくだる。調整は口縁部内外面、鍔部内外面がヨコナデ。体部外面は横方向のヘラ削り、内面は不定方向のナデが施されている。体部外面には煤がわずかであるが付着している。胎土は良質であるが、0.2～0.3cmの白色砂粒を含む。金雲母の微砂粒も少量含む。色調は暗灰色。採集地不明。

⑰　口径19.8cm、鍔部径25.6cm、鍔幅2.3cm、残存器高7.9cmをはかる。口縁部は内傾して、段をもつ。口縁端部は上端で平坦な面をもつが、内端でわずかに肥厚して丸みをもつ。鍔は厚く、ほぼ水平に付く。鍔部下面には貼り付け時にできたと思われる突起が認められる。調整は口縁部内外面、鍔部内外面ヨコナデ。体部内面は刷毛目。鍔部下面から体部外面にかけて煤がべっとり付着しているため、観察できない。胎土は良質であるが0.1～0.2cmの白色砂粒を含む。色調は暗灰黄色。採集地不明。

練鉢⑱⑲

⑱　口径24.9cm、残存器高6.5cmをはかる。口縁部は片口で、大きく外傾して開く。口縁端部は断面三角形状を呈す。底部は欠失しているが、浅い練鉢と思われる。調整は口縁部内外面、体部内面、体部外面上半が回転ナデ。体部外面下半は回転ヘラ削り。回転ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。胎土は良質であるが、白色の微砂粒を少量含む。色調は暗灰黄色。焼成は良好で堅緻。採集地不明。

⑲　底径7.7cm、残存器高2.9cmをはかる。底部のみ残存。ほぼ平底。調整は外面から外底面にかけて回転ヘラ削り。他はすべて回転ナデ。回転ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわり。胎土は良質であるが、0.1cm程度の白色、黒色砂粒を含む。色調は灰色。焼成は良好で堅緻。採集地不明。

瓦質土器（挿図17　図版20）

羽釜(21)

口径17.9cm、鍔部径25.7cm、鍔幅1.4cm、残存器高5.0cmをはかる。口縁端部は内湾してたちあがり、端部近くで内側へ水平にのびる。口縁部には段がつかない。鍔は薄く、ほぼ水平に付く。端部は斜方向に平坦な面をもつ。調整は内外面とも回転ナデ。鍔部下面から体部外面にかけて、わずかであるが煤が付着している。胎土は良質であるが、白色の微砂粒を含む。色調は黒灰褐色。採集地不明。

備前焼（挿図17）

擂鉢(22)

口径20.0cm、残存器高2.5cmをはかる。口縁部のみ残存している。口縁部は屈折して立ちあがり受口状を呈す。調整は内外面とも回転ナデ。胎土は良質。外面には煤が付着している。採集地不明。

瓦（挿図17　図版20）

軒丸瓦(23)～(25)

(23)　内区は右まわりの巴文。その外側に圏線がめぐる。外区には小さな珠文が配されている。周縁は幅1.8cmの直立縁である。瓦当面にはハナレ砂の使用が認められる。胎土は良質。色調は暗灰色。採集地不明。

(24)　内区は右まわりの巴文。その外側に圏線がめぐる。外区には小さな珠文が配されている。周縁は幅1.4cmの直立縁である。胎土は良質。色調は暗灰色。採集地は裏に「三鈷水ノ下ノ谷（片原山）拾得 大正十四年二月」と注記されている。

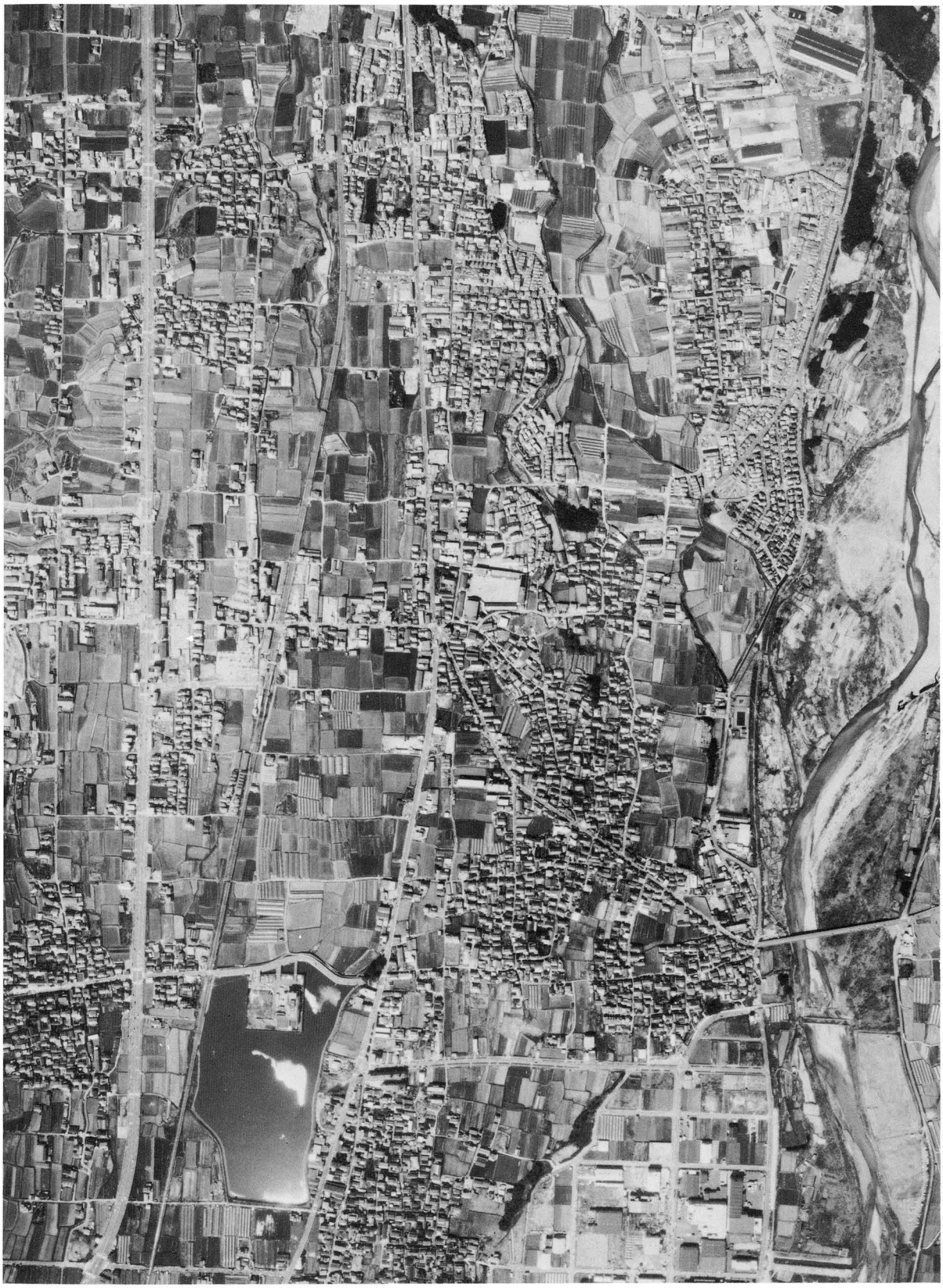
(25)　内区は右まわりの巴文。外区には大きな珠文が配されている。外区の珠文は18個に復元できる。周縁は幅2.4cmの直立縁である。胎土は良質。色調は暗灰色。採集地は裏に「現境内スグ南ノ谷間通称トンドヤブ於拾得大正十四年二月」と注記されている。

棟込瓦(26)

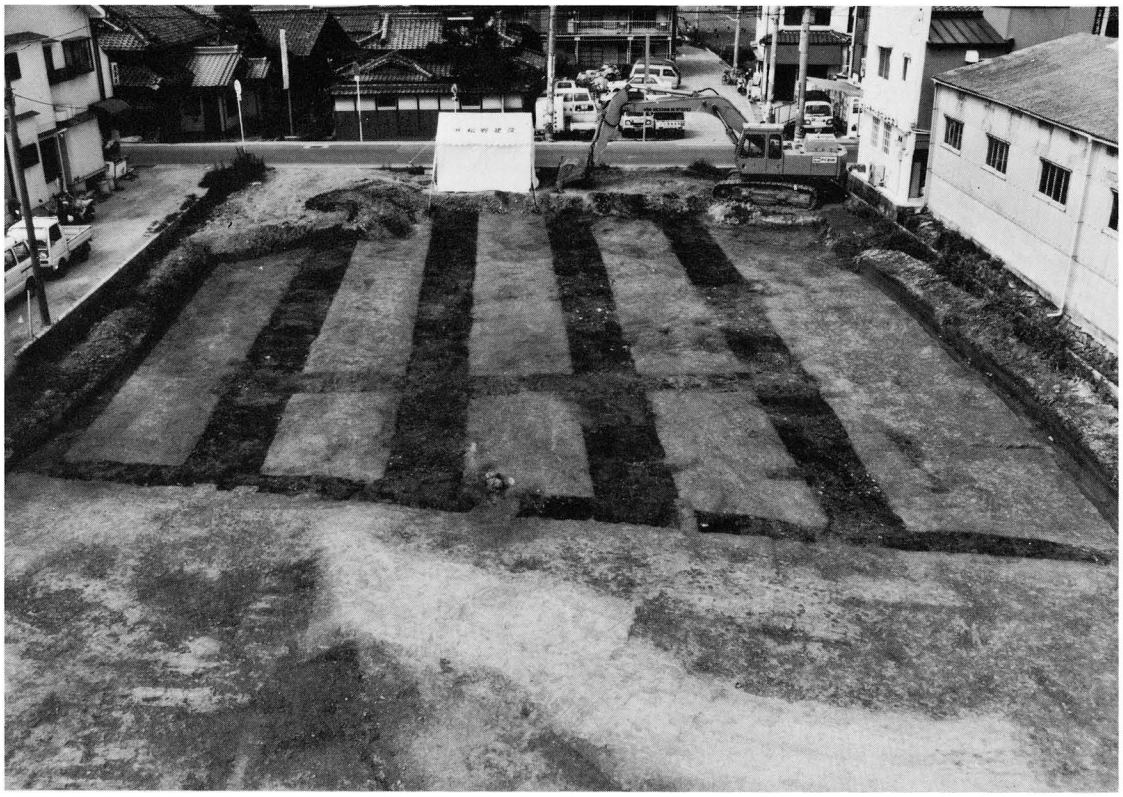
菊丸の棟込瓦である。中央に１＋５の小さな珠文を配し、そのまわりに16弁の花弁を配している。周縁は幅0.9cmの直立縁である。胎土は良質。色調は暗灰色。採集地不明。

（粟田　薫）

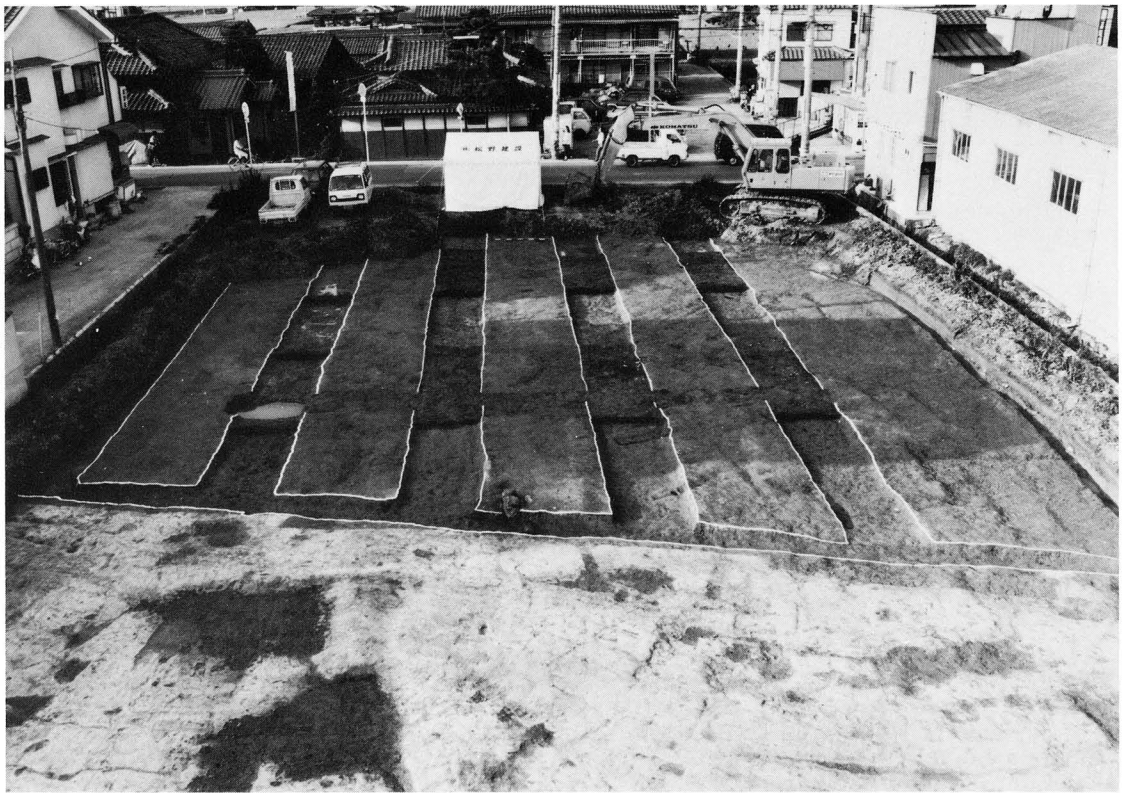
図　　版



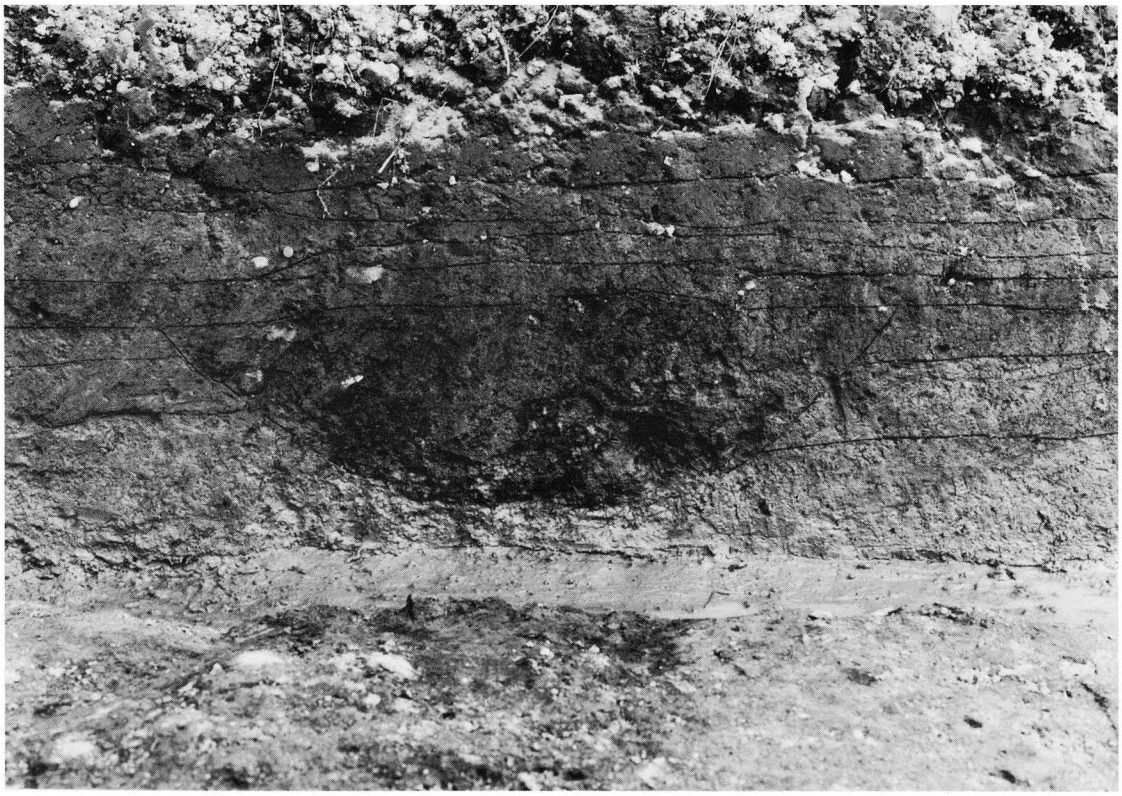
喜志西遺跡周辺航空写真



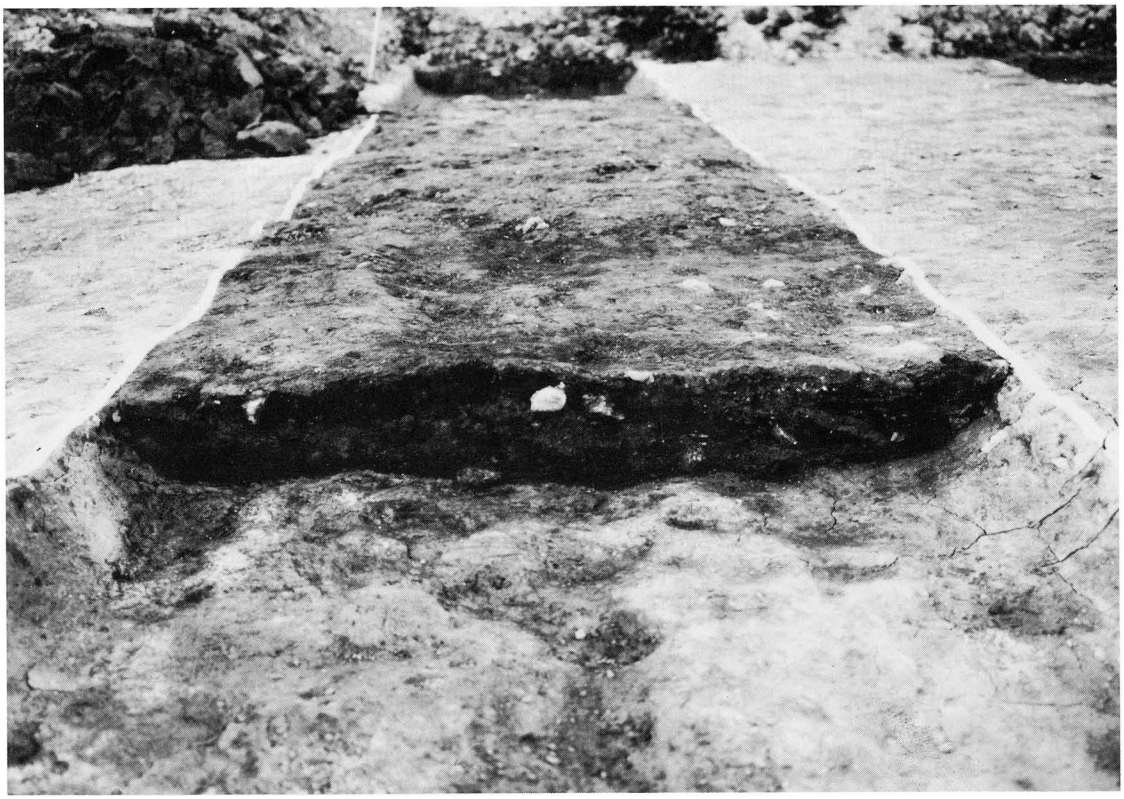
半田溝全景（検出時）南から



半田溝全景（完掘後）南から



半田溝１東壁断面　西から



半田溝３断面　南から

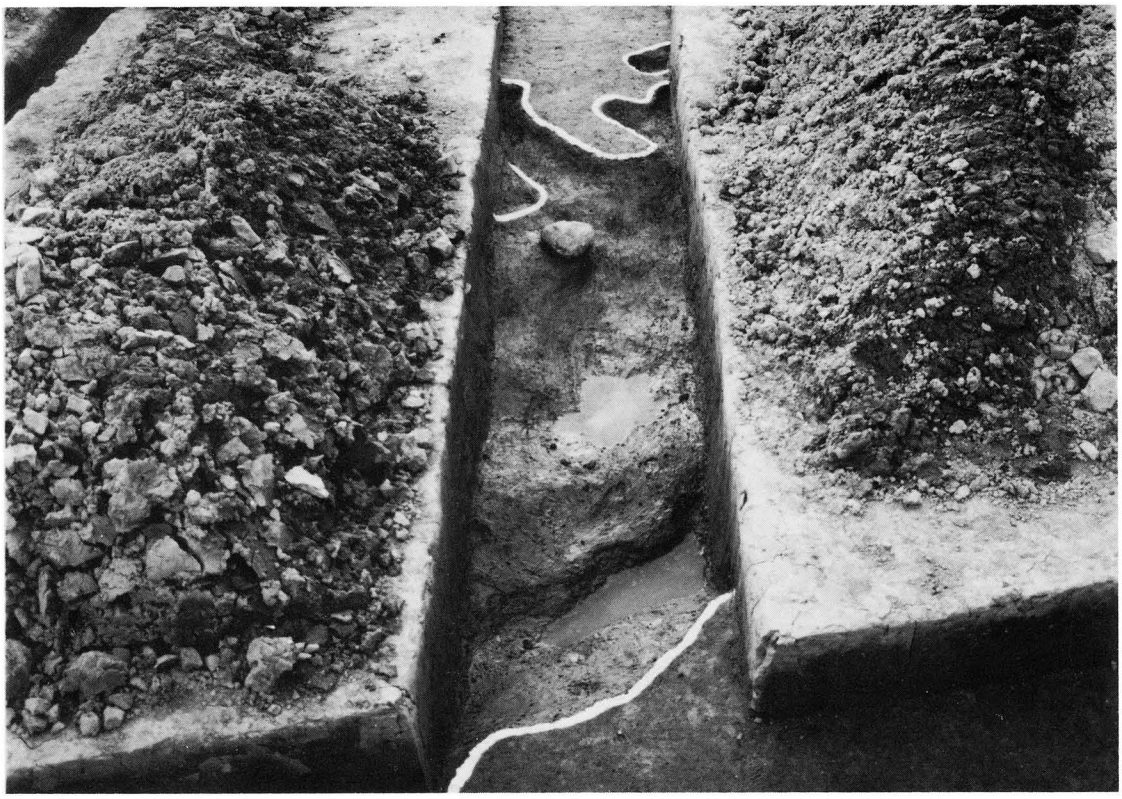
自然流路(第５トレンチ) 全景　北から

自然流路(第５トレンチ) 全景　南から

第５トレンチ全景　南から

自然流路遺物出土状況　東から

溝１（第５トレンチ）北から

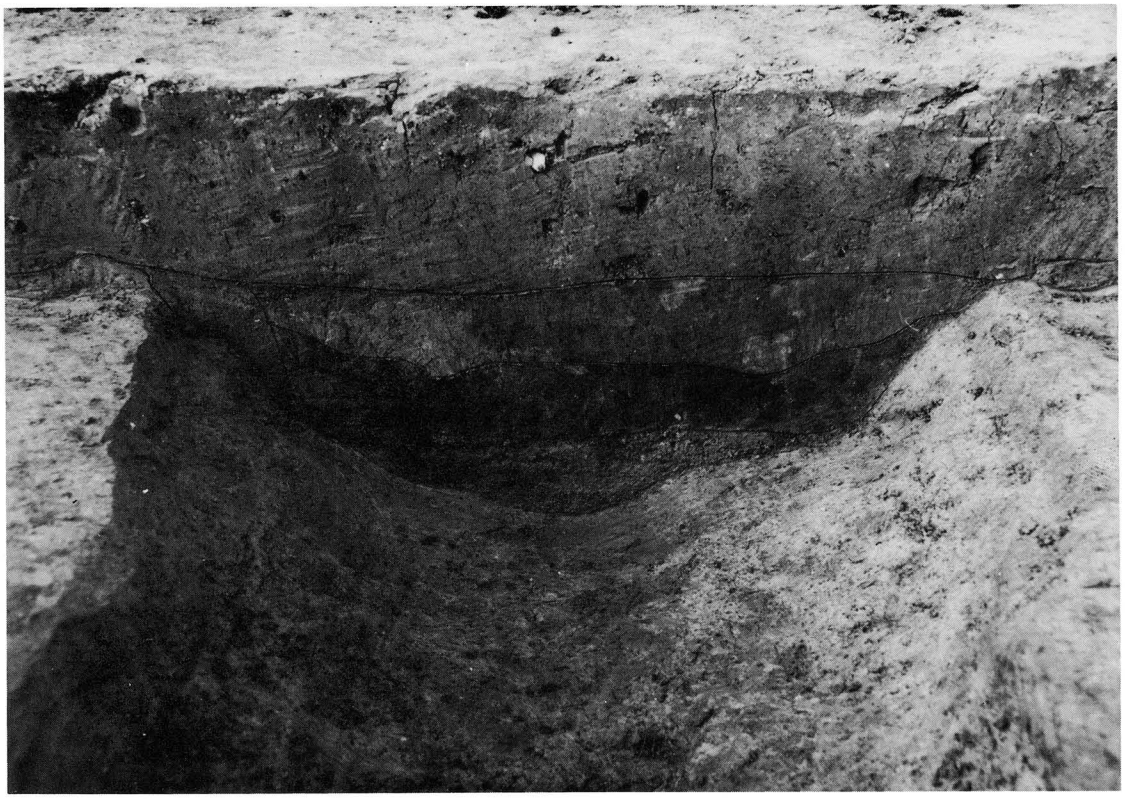


溝１（第４トレンチ）東から

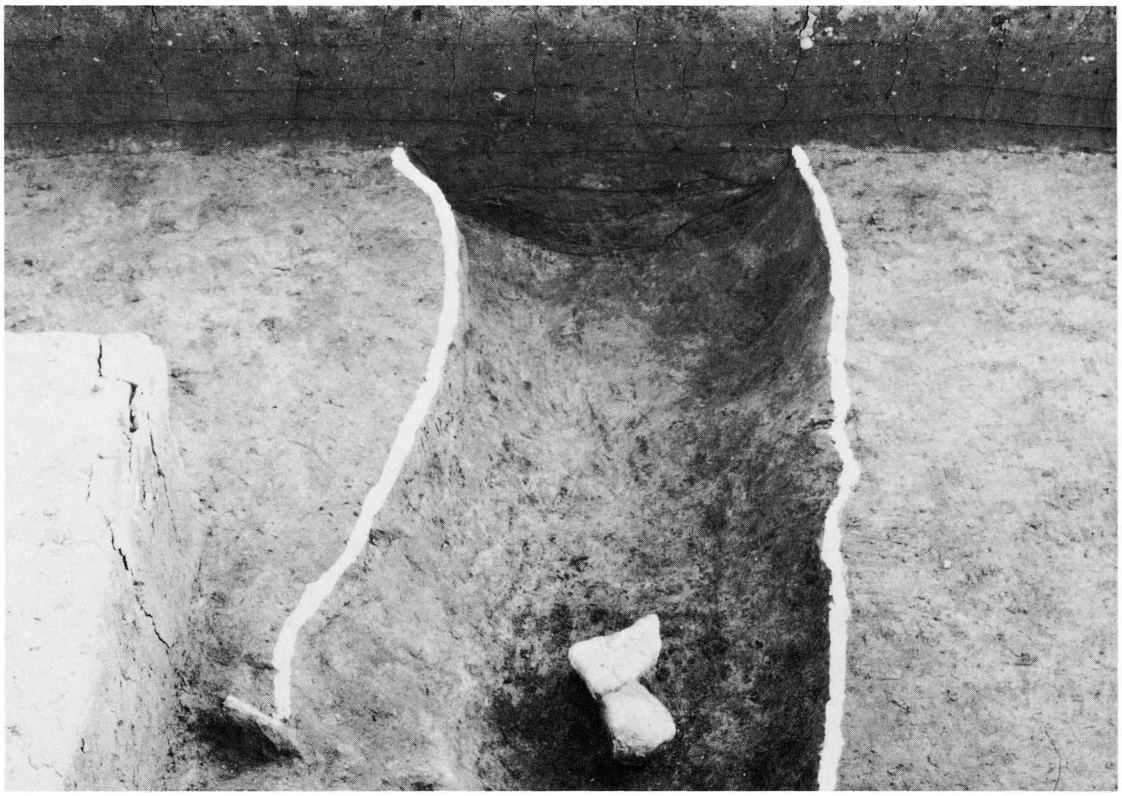
溝１（第３トレンチ）北西から

溝１（第６トレンチ）南から

溝２（第４トレンチ）西から



溝２断面（第４トレンチ）南から



溝２（第３トレンチ）北から

溝２断面（第３トレンチ）北から

第１トレンチ全景　南から

第２トレンチ全景　南から

第２トレンチ西半部全景　南東から

第７トレンチ全景　南東から

甕棺墓検出状況　西から

甕棺墓検出状況　東から

甕棺墓検出状況　北西から

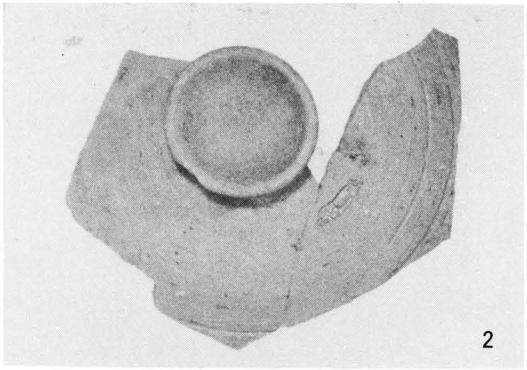
甕棺墓検出状況　北西から

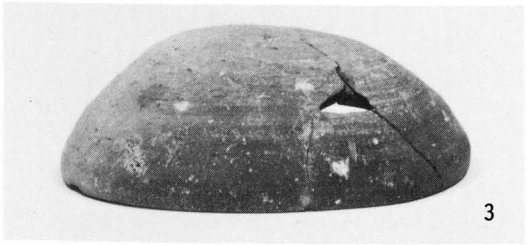
甕棺墓全景　北から

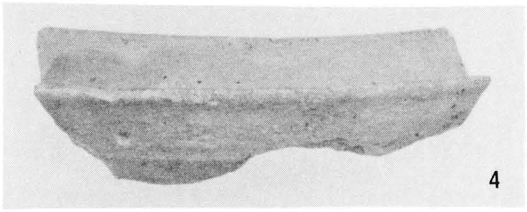
甕棺墓全景　南から

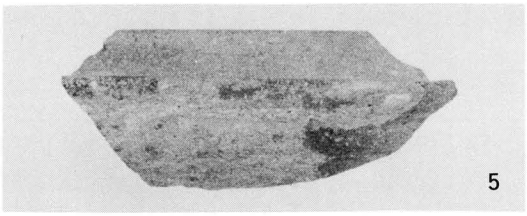
甕棺墓全景　北西から

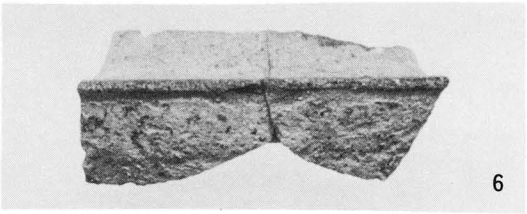
甕棺墓掘り方全景　北から

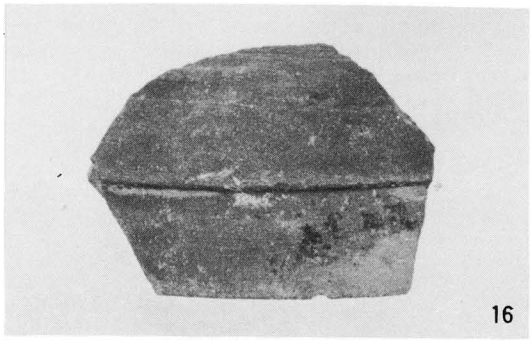


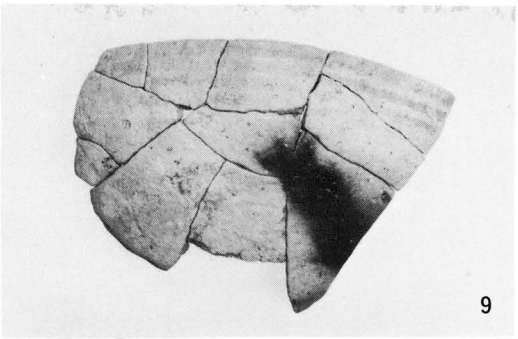


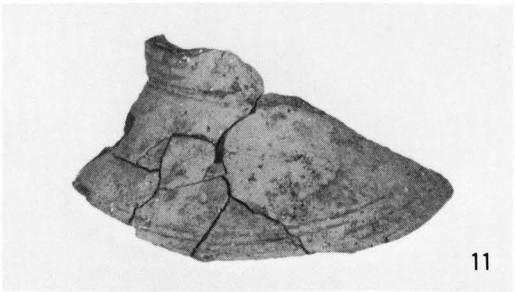




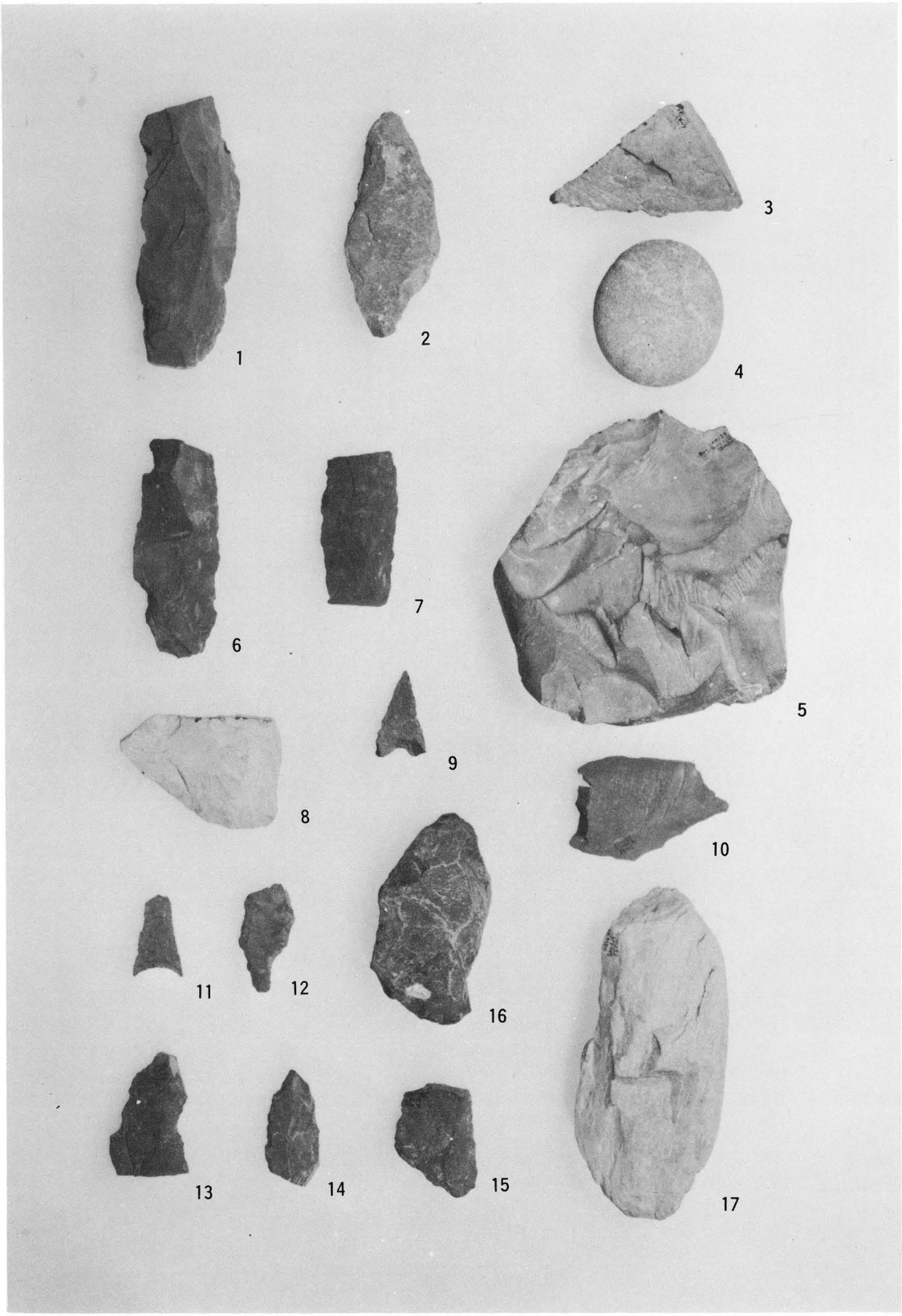






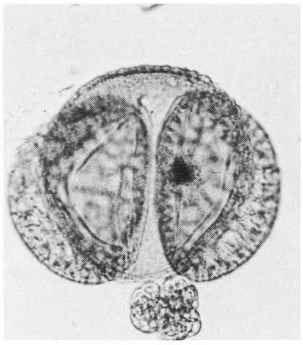


出土遺物(土器)

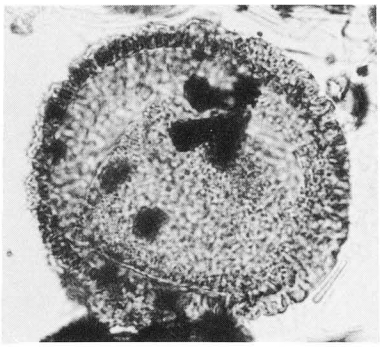


出土遺物(石器)

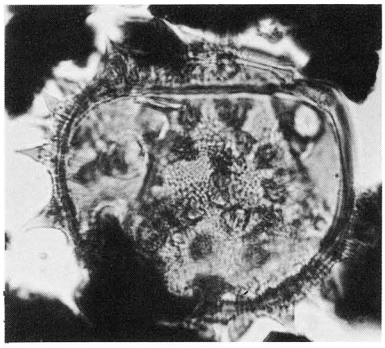
図版十八



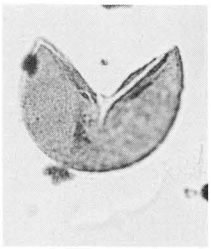
1. *Pinus*



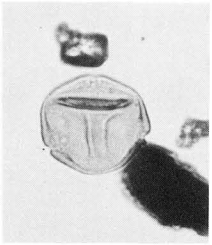
2. *Tsuga*



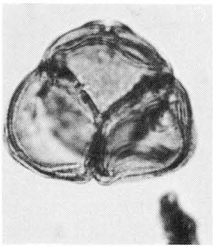
3. *Gossypium*



4. *Cryptomeria*

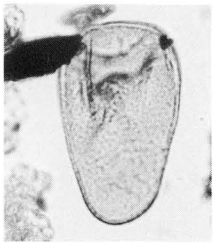


5. *Betula*



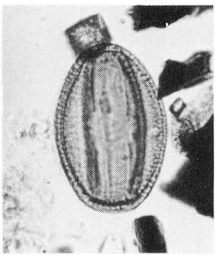
6. Ericaceae

7. *Lon: cera*

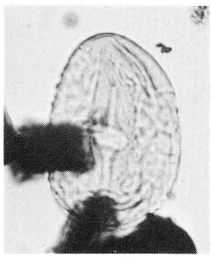


8. Cyperaceae

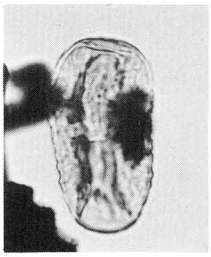
9. *Fagopyrum*



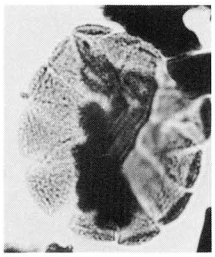
10. *Fagopyrum*



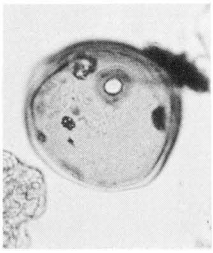
11. *Vicia*



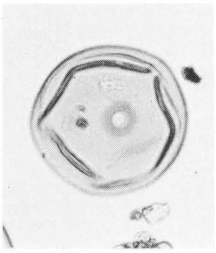
12. *Vicia*



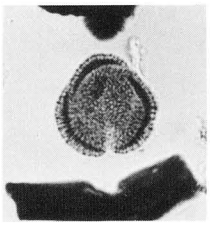
13. *Sesamum*



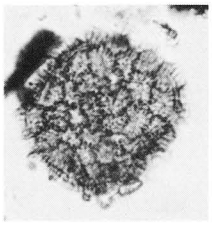
14. Gramineae



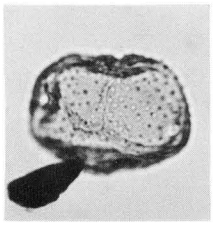
15. *Oryza* type Gramineae



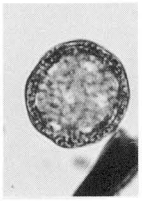
16. Cruciferae

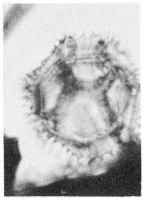


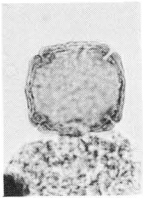
17. *Persicaria*



18. Campanulaceae



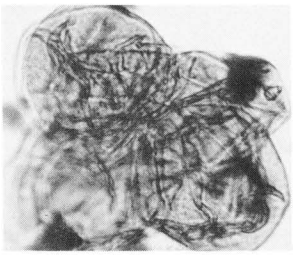




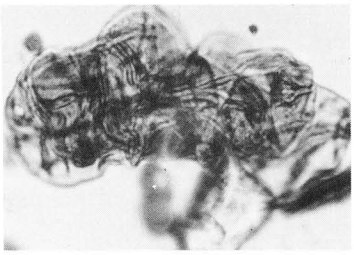
19. Caryophyllaceae

20. Compositae

21. Haloragaceae



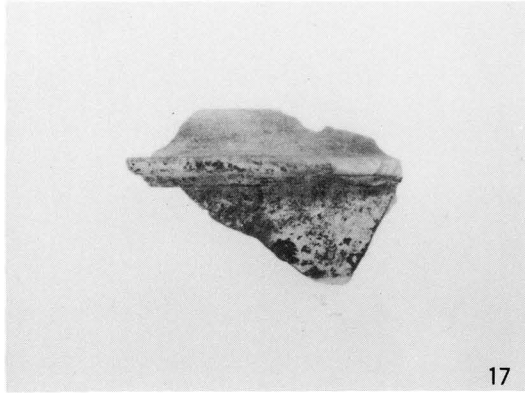
22. Gram:neae

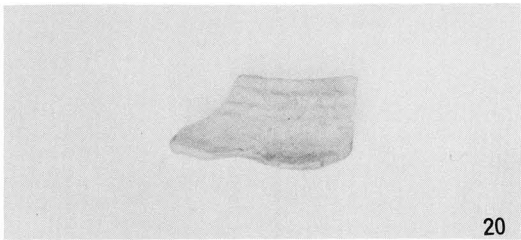


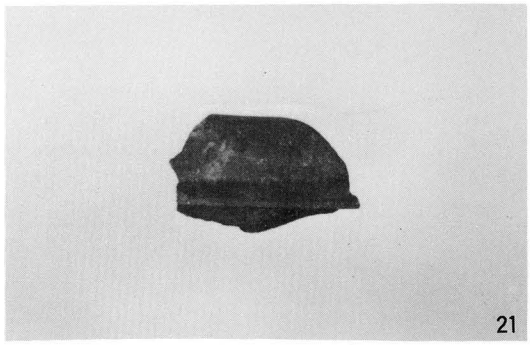
23. Gramineae

花粉遺体（×600）

16

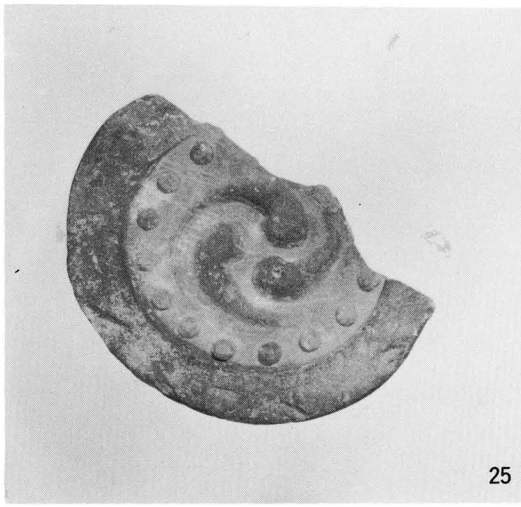

17

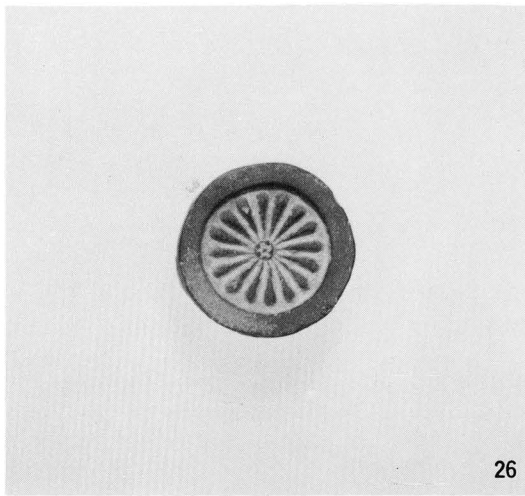

20


21

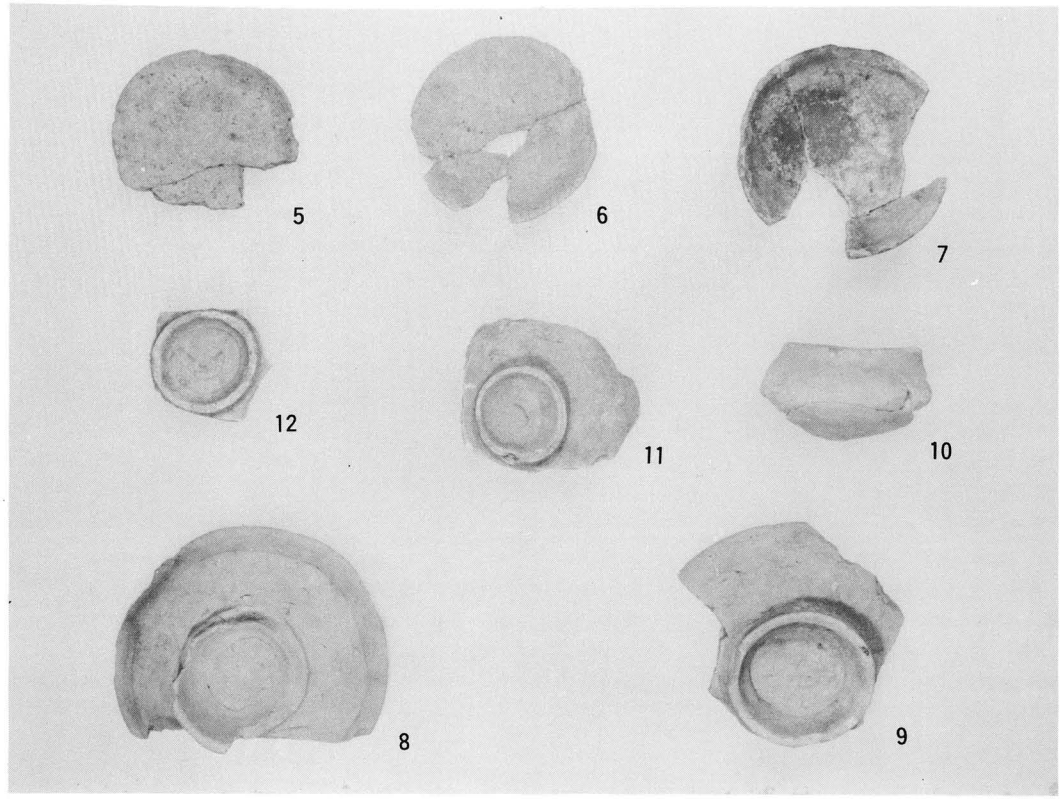
23

24


25


26

佐備神社元宮司井上隆彦氏採集資料



佐備神社元宮司井上隆彦氏採集資料

富田林市埋蔵文化財調査報告14

発行年月日　1986年３月31日
編集・発行　富田林市教育委員会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
印　　刷　橋本印刷株式会社

1986. 300